

なかつた、門の電燈に照らされた白い顔は、何といふ事もなく淋しかった。

十三年の昔、菊次はお菊と云つて新橋の衆川の家に、丸抱へで出て居た、其頃私の友人の家が中通にあつて、隔日のやうに其處へ遊びに行く中、私とお菊とは幾度となく顔を見合はせた、友人の家と衆川の家とは、二階の裏窓が鼻の先に向ひ合つてゐた。

衆川の内箱が、友人の家の婆アやに、冗談半分云つた事が直ぐ友人の耳に入つて、私は散々揶揄はれた、二十二歳のお坊さん、茶屋酒の味もまだろくろく知らぬ私は、眞赤になつたが、半月程の後、友人の酔興から、私はお菊と遂に馴染の交となつた。

「随分思つてゐましたわ。」と唯此の一句が、其夜のお菊の總てであつた。

素人から直ぐ一本で出た十七の初心、私も堅氣な商人の忤、學校生活こそしたれ、遊興にも女にも馴れぬ身は、唯固くなつて、差向になつた二人は、今

から思ふと、全く智慧のない逢瀬を纏に遂げたのであつた。

怖々逢つた数は十一度、女は内箱に用心され、主人に睨まれ、私の座敷へ來られなくなつた、私も我家の奉公人同様の境遇、費用も時間も思ふやうにはならなかつた。

友人は私の鬱々するのを笑つた、而してそんな古風な事は今時流行らないと嘲つた、一方家の方の警戒も始まつた、私もお菊も、ソワソワとして、他人に直ぐ覺られるやうな、誠に幼い戀をしたのだ。

斯くして二人の逢瀬は何時としもなく絶えて了つた、お菊は何うか知らず、わたしは此の物足りなさを紛らすべく、到頭ダラダラに遊興を覺える人となつた。

本意なく別れて十三年、私は人目の前に、藝妓と墨々話の出来る年頃ともなり男ともなつた、お菊は娘らしかつた顔も様子も變り切つて、技倆のありさ

うな、立派な姐株になつたのである。

是非来てくれと云ふにさへ、菊次は藝妓の色氣を見せず、詞を綺麗に、物腰優しく、懐かし氣にのみ話した恰恠、心の奥には何と思つてゐるか、眞逆に阿容々々尋ねはされず、座敷へ呼んで偕己惚らしい昔話も氣恥かしく、縦令又思切つて逢つて見た處で、過ぎし夜の夢を再して、今更彼の幼かりし戀を汚すも惜しと、流石に氣には掛かりながら、私は強ひて逢ひたさを堪へた、私は戀を弄ぶ事を知つたのでもあらうか。

此のまゝ過ぎて明くる月、それにしても私は精勵會の會員に注意した、けれども菊次は見えなかつた、次の月も又次の月も。

忘れても復思出す、未練では無く忘れ切れぬ、私は秋の大會の時、それとなく樂屋の人に聞くと、菊次は疾うに廢業して、高砂家の看板もそれ限りになつたとて、行方を斯うと知る人もない。

然うあらう、自前にして置いた旦那が素人にしたのであらう、家へ來いとは甘く見た世辭であつたと、私は肚裡で冷笑する氣にもなつたが、イヤ世辭と云ふでもあるまい、友達づく位の普通の挨拶、感ぐるは卑いと、思ひ返して廊下へ出ると、「村山さんでゐらっしゃいましたね。」と云ふ年増、「何時ぞやは失禮を致しました、これは菊次姐さんから疾うに託かつて居りましたのを、つひ。」と差出すは一封の手紙、此の女は、長唄會の時玄關で菊次と一緒に逢つた人、針妙でもあるのだらう。

手紙を請取つて裏書を見てゐると、「姐さんもお可哀想に、御實家でお歿りなさいまして、昨日が初七日に。」と云つて眼を數瞬き、「死んだらこれを必とあなたにッて、お歿りになる朝御自分で。」とばかり、「三十やそこ等で」と私は何とも云へぬ心地の裡から唯一言。

「わたくし肺病で死にます、一度お目に掛かりたう御座いました、村山様、

しめ。」と本名を書いて、巻紙に亂筆の三行、封を切つた私は涙ぐまずには居られなかつた。

それから半歳、探り得た菊次の墓を深川に尋ねた、今年の夏の初め、それは菊次と十三年振りに、倶楽部で逢つた日の五月の十日。

人質の女

「本當の名前を出す事だけは堪忍して下さい、當たり障りが出来て困りますから。」

自分が親く見もし聞きもした怪談と云ふのを、わたしに話すとて、落語家の定丸は、先づ斯う斷つて置いて、而して續けて斯う云つた。

「わたしの名も曖昧にして置いて下さい、饒舌つたのが知れると、もう稼ぎに行かれませんか、師匠にも叱られますから、ね、其の代り外の事は、幾ら

正のまよを書いて下すつても構ひません、是れッほッちも嘘偽は無いんです。」

定丸は、右手の示指の先一分ばかり残した處に拇指の先を當てよ、わたしの眼の前に出して見せた。

乃ち、定丸と云ふのは假の名である、けれども此の談は有りのまよである、定丸は古い落語家で、其の派の古老と云はるよ男、齡は五十を越してゐるが、なか／＼元氣な、雑談好きな、面白い藝人である。

「ねエあなた、お談と云ふのは斯うなんだ。」

定丸は、師匠や兄弟弟子共々に、去年の八月北海道へ稼ぎに渡つた。

賣込の都合で、札幌を振出し、小樽、函館と、奥から逆に口元へ巡業する事になり、其の通り打つて札幌でも小樽でも上景氣、間隙々々に少しづつ傍へ

入つた處で打つたのも當たつて、一座の成績からは大出来であつたが、興行界に有り勝の良くない奴に引つ掛かつて、もう二日延べろの、もう一日負けろのと種々な難題を出され、懷都合には障らぬながら日數は馬鹿に掛かつて了つた。

素人料簡で考へると、縦令何う云ふ契約で行つたにしろ、身賣でも爲はしまし、興行師側の者に、然う好き勝手にされる奴があるものかと、齒痒くも亦嘘らしく聞こえも爲やうが、地方の興行界には、素人は借置き商賣人にも口を開かせるやうな、思ひ切つて悪賢い怖ろしい遣口が随分ある。

定丸等は此の凄いのに喰付かれた、それを纒辛の感で切抜け、別の人の手によつて、函館へ新規契約で乗込んだのは、九月の二十九日である。

「斯様な内幕談染みた段取は、聞いてゐて悶つこしいやうにお思ひでせうが、此の興行と云ふ剽輕者の經緯から、到頭怪談も持上がつたんで。」

定丸は間で斯う説明を加へた。

一座が乗込んだのは、函館の劇場北海座、土地では、立派な小屋である。前景氣盛んに、十月一日に初日を出した、初晩大入、二日目も亦大入、興行人側も樂屋も大悦である。

すると、其の三日目の午後、劇場の近くに火事が始まつた、四邊は忽ち大さわぎ。

定丸等は、地方興行の例として、樂屋に寢泊をしてゐるのである、前座、下座の女、二つ目の落語家、西洋手品一人、絃物の女二人、それに眞打と、一座總て十何人、此の中で、眞打だけが外の宿屋に泊つてゐるので、ソレ火事と云ふと、樂屋に居合はせた十人ばかりは、思ひくゝに断出した。

火事に馴れ、旅にも馴れてゐる定丸は、悠々と東棧敷に上がつて、人聲のす

る街の方を見た、けれども見えない、方角は舞臺の横の方に寄つてゐるらしい、何處ぞ恰好い見物席は無いかと知らず、見廻すと棧敷の突當りに開戸があつて、舞臺の上の方へ行かれさう。

窓ぐらゐあるだらうと思つた定丸は、其の開戸を開けて見た、すると、三尺幅の廊下が一間ばかりあつて、其の突當りに又開戸があり、「メ切」と書いた古ぼけた紙の貼札がしてある。

廊下の左右は羽目で、其の左側即ち舞臺の方の上の處に、採光の小さい硝子窓があるばかり、屋外の火事の見えやうが無い。

彼等藝人の暢氣さ、定丸は「メ切」の戸に手を掛けた、棧の摘木を右へやつて前へ引くと、開戸は何んの事もなく開いた、内は明かるくつて、二疊敷の室半分に、劇場用の客座蒲團が、人丈ほどに幾側にも積上げられてある。

「何が締切だ、蒲團部屋ぢや無えか。」

定丸は口小言を云ひながら、それでも恰どお誂への右の窓から、硝子越しに、左の方へ横目を使ひく、四五丁ほど先の火事を見た。

然し、火事はホンの小火であつた、見る間に白い煙が上がった。

「何んだ詰まら無え。」

定丸は又獨語を云ひながら、室内を見廻した。

今覗いた小さい硝子窓、其の二枚の戸には挿込みの錠が卸してある、積んである座蒲團は、自分等が樂屋で借りて使つてゐるのと同じ柄、同じ古さの物である、天井と羽目と畳と、これは割合に新しい、而して其の羽目の左の中程には、切抜いた形の窓がある、其の周囲には種々の痕だの疵だのがある。

「電気部屋だつたのだな。」

それにしても斯様な處に小綺麗な蒲團部屋、自分達のゐる部屋よりも氣が利いてゐると思ひながら、定丸は不圖足下を見た、見ると躑てキヨロくと畳

の上を、調べるやうに覗き始めた、定丸の眉の根は自ら寄つた。

近所に火事であつたのが支障となつて、此の夜の客は薄かつた、思はぬ災厄に愚痴たらぐの一座の者は、自然と藝に身が入らなかつた、それで前の二日よりは、二十分も打出しが早かつた。

街で何か食べて、場内の片付いた頃歸つて來た定丸は、座の定番の老爺甚次郎と云ふのと、下棧敷の片隅で世間談を始めた、乗込の翌日から、老人同志大分談が合ふのである、と云つて、老人同志とばかりでは定丸が納まるまい、樂屋の者が可笑味に、「お」の字を附けて、「お甚次郎」と呼ぶ此の爺さんは、達者自慢の六十八、定丸はまだ五十六の、其の六をさへ成るだけ他人に知られたくなく思つてゐるのだ。

それは兎に角、二十四年間一日も休まず勤續してゐると云ふ此のお甚次郎爺

さんは、今日の晝間の火事の火元を罵つた、怒ひ小火であつた爲、遠慮休もせずに済ましたのが、却つて大きな災難であつた、もう二三軒も焼ければ好いと、脂で染まつた亂杭齒の間に煙管を咬へた。それを見た定丸は不圖斯う云つた。

「火の用心が悪いので、締切と書いて置くんだな。」何處が締切。」

爺さんは變な顔をしたが、定丸は平氣である。

「舞臺の上の蒲團部屋さ、以前は電氣室なんだらう。」

「入つたのかい。」悪いか。」

爺さんは黙つて定丸の顔を見てるたが、少時して首を突出し小聲になつて、

「お前さん、彼處は明かすの間だ、女を知つてる男、男を知つてる女、是れ等が彼處へ入ると、何か必と祟がある、締切としてあるに、飛んだ事をしなすつた。」

自分も其の祟を怖るゝかの如き顔色である、けれども定丸は、多年の旅興行の先々で、種々の怪い日にも遭つた、談は尙更多くを知つてる。

「化物が出るので締切かい、其の化物は音をさせるだらう。」

事も無氣に云ふ處を、爺さんは目顔で抑へて、

「音もする、變な聲もする、だがね、正體は知れてゐる、女の幽霊だ、實はね、彼處が電氣部屋の時分、首を縊つて死んだ女があるのだ、それが可哀想なのだ、念の残るも無理は無え。」へえ。」

爺さんは愈曇つた顔をする、定丸は案外と云ふ面色。

「實説かい、音がしたり聲がしたりには、わたしは別に驚かないが、女の變死人は些と忌だね、一體何うなんだい、それは。」

四邊を見廻して、爺さんは密々と語り出した。

一昨々年即ち大正三年の十一月の上旬、此の北海座へ轉け込んで来た旅藝人の一座があつた、それは「新派紅美團一行」と云ふ田舎廻りの怪い連中で、役者、假髪、衣裳、小道具、囃子、一切合財突括めて總勢二十五六人、自分等でピラも書く、太鼓を敲いて街も廻る、不如歸、金色夜叉、己が罪、さては小説からの新作、演藝雑誌の筋書丸取りの新流行狂言、時としては新聞種の際物、其筋の許可さへあれば、悲劇喜劇何でも御座れに演ると云ふ斯かる輩にはお定まりの疎放、それでも、團長と自ら稱する座頭の花井紅美は、年の頃三十四五、苦味走つた好い男、其の女房のお美代と云ふのも、二十七八の垢抜けのした美しい女で、これは下座の頭をしてゐた、後に聞けば、可なりな家の内儀であつたのが、不心得をして、紅美の女房になつて了つたのだとの事。

處で、餘事は抜きにし、御難續きで蹙みながら無理に泣付いて北海座を開け

た此の一團は、所謂虻も集らぬ大外れに、又借金の上塗、其の金の抵當にお美代を抑へられた、とだけが大摺に云つて置かう。

「優しい事を云つてゐれば、喰詰者に好いやうにされて了ふんだ、其處で懲らしめの爲に、其の女房と云つてゐる情婦を、人質に留めて、餘の奴等は追つ放してやると、十二月になつても音沙汰が無え、座へも當人へも手紙一本來ねえ、紅美と云ふ野郎女に飽きてゐたらしい、酷い奴だ、座でも忌々しがツて自然に構付けなくなる、女は寒くなるのに薄着だ、錢は無くなる、逃げはされず、それで何時か氣が些と變になつての、亭主と小屋主とを怨んで。」

爺さんは其處等を見廻し、

「明ければ一昨年の正月の七種の晩だ、彼の電氣部屋で、電氣の線を引外して、それで可哀想に、其のお美代と云ふのが首を吊つて。」

後は云はずに溜息を吐く。

「フーム、然うかい、彼の二疊で。」「天井裏の横木からぶら下がったので、それから新規に天井を張つて、羽目を張替へてよ、電気部屋は下手へやつて、疊まで替へた。」「其の譯で、幽的が獨身者の外は誰にでも嫉妬で仇をする、と云ふ一件か。」「何うも然う云ふ成行だ、今までがね。」「それで、誰か正體を見たのかい。」「蒲團部屋へ入つた爲に病ふ者やら死ぬ者やら、滅多な人には云へ無えが、それは實に物凄、お前さんは獨身かね。」「今獨身だつて、生れたまゝの初心ぢやア無いよ。」「ウム。」

爺さんは瞬をしてる。

「祟がありさうなら、供養でもすると爲やうが、彼の蒲團部屋へ出入るのは誰だい、子供ばかりか、エ。」「年は十七だが、子供さ、隣家の小屋主の家の下女で、お新と云ふのが一人。」「一件の座主の處の女中か、十七。」「十七でも大丈夫だ、それとなく念が押してある、生娘で無えと間違が出来ると云つ

て。」「然うかい、何しろ忌な談だ。」「外の人に云つては困る、だが、お前さん氣を着けてね。」

定丸は頷いた、甚次郎爺さんの眼には氣遣の色が浮ぶ。

胸に一物の定丸は、次の日の正午頃、密と彼の「メ切」の戸の内に入つて、又疊の上を熱々視て、而して兩手で搔寄せて手掌に載せたのは、鼠色と焦茶色との毛のやうなものである。

「幽霊よりは舐の祟らしいが、白つほいのは何んだらうな、昨日もあつたし、今朝女中が掃除をしたのは確だのに、又斯様に落ちてゐるやがる、お美代の一、念、何んの獸になつたか、音のするのも聲のするのも、此奴の所業だ、今に見ろ。」

病つたり死んだり、と云つた談は別事にし、蒲團部屋の怪は唯此の毛の持主

であるとはばかり、定丸は理窟立て、怪談を考へた。
 負けぬ氣の男、彼は此夜打出して後、密と彼の部屋の外まで忍んで行き、一時間近くも聞き耳を側てゐるたが、何の事も無い、鼠の歩く音すら響かぬ。
 張合抜けのした定丸は、次の朝七時頃、まだ場内の森としてゐる時、念晴らしに又出掛けた、すると今度は耳に入るものがある。

「聞いて下さい、斯うなんです。」

定丸は、わたしに其の顛末を一息に話すのである。

「手取り早く云ふと、蒲團部屋の途中で、お新と云ふ下女と、小屋の下足兼掃除番の源吉と云ふ二十五六の若男とが、面白可笑く密々談さ、其奴を取つ締めて置いて、揚句に些と立役になつて、嬉がらせの一つも云つてやりながら、不意と氣が着くと、獸の正體が分かつた、疊の上に落ちてゐた毛は、お新が穿いて来る安草履の裏の、羅紗見たやうな切地の毛が抜けるんです、お新め

不精をして、古い上草履の儘で、疊の上を歩きやアがるんだ、イヤ笑ひ事ちやア無い、お新め、それもまだ好い、相手のある男女は入り得ないとなつてゐるを、幸に圖々しく此處で掃除番と構曳をしてゐたのを、知らぬが佛のお甚次郎なぞが、聲がするのヤレ何が何うのと、魔へて云つたに違ひない、けれども怪談はこれだけでは打出にならないんです、今の若い者同志、怪談を馬鹿にして掛かつた二人には、何うも祟らしいものがありましたよ。」

定丸の笑顔は何時か眞面目になつた。
 「異見をして密と伏せて置いてやつた效も無しで、其の二日後の晩に、お新と源吉は斷落をしたのですがね、翌朝、五稜郭の鐵道線路の側に、お新が細帯で絞殺されてゐると聞いた時には、流石に悚然としましたよ、爺さんは、今に源の野郎もだと云ひましたツけが、女を害めたとすれば、何れ終は知れたもので、それもこれも皆、人質になつた女の祟だと云はれても、此奴は上

草履では蹴散らせませんや。」

苦笑をして談を終つた定丸の顔色を、今見るやうに思出す、わたしはこれを書きながらも、お美代と云ふ女の事は考へたくない、暢氣の定丸も、立ち際に法事をして來たと云ふ。

金　　扇

「ねえお婆アちやん、最早歸りませう。」
と云ふ可愛らしい小兒の聲が、わたしの背後の芝生の方で聞えた。

「徐々行きませうかね。」

今度は其のお婆アちやんの聲だ。

雷雨に伴つた昨日の風、それに揉立てられた餘波の響き、太平洋の荒濤は、犬若の巨巖に凄まじく碎け散つて居る其の岩山の上に、人としては今自分一

人と思ひの外、老人と幼い者との話し聲、わたしは振返らずには居られなかつた。

先方の二人は、わたしと顔を見合はせて會釋の微笑、而して土と石との山路を、手を引合つて徐々と降りて行く。

お婆アちゃんば、申譯ばかりの丸髷を載せた瘦せた體で、ネル地のやうな黒つほい單衣に、幅の狭い黒襦子の帯をチヨコンと締めて居る、小兒は今時の男の兒に珍しく、紺地に荒い縞のお召の、袖のブラウくと長い單衣に、萌黄に種々な筋の入つた博多の角帯、茶つほい帛の帽子を冠つて居る、わたしと同時に、犬吠に来て居る旅客に違ひないが、と思ふと共に、わたしは直ぐに氣が着いた、ウム彼の仲間だ。

彼の仲間とは、犬吠の東雲旅館に昨日の朝から来て居る東京某活動寫眞會社の同勢、技師俳優事務員其他で四十幾名とかの泊客、其の中の子役だなど

思つたのである。

昨日の晩飯前の湯殿の賑やかさ、五月の末の今頃何うした事と、今日晝飯の折女中に訊くと、活動の連中が寫眞を撮りに来たのであるが、着くと早々彼の大夕立で、昨日は勿論無駄泊り、今日も朝一寸日が見えたので支度をし掛けた處直ぐ曇つて、光線の工合が悪い爲又無駄遊び、然うく泊つては居られぬゆゑ、明日は何卒無理からでも半分ばかりは寫りたいと云つて居る、と斯う云ふ話。

「何様な役者が来て居る。」「新派の仁達で、何んでも『新己が罪』とか云ふ寫眞を撮るんで御座いますツて、女形なんぞには随分綺麗な仁がお在です。」「其方へばかり行つて居ちや困るよ。」「御冗談ばツかり、綺麗な役者衆もお在の代りに、小兒衆が大勢。」

女中達に可なり世話を焼かせもし、また、外の客の愚痴もあるらしい口氣だ

ツた。

其の子供衆の一人、今のも無論子役であつたらうが、新派の活動の子役として、兎にも角にも縮緬の着物を着て居るのは、『己が罪』にある好い役の小兒に似た役が、『新己が罪』にもあつて、其の子を勤めるのが彼れなのではあるまいかと、わたしは要らぬ事まで考へた。

それにしても彼のお婆アさん、小綺麗にはして居るが、帯も着物も年數物の痛々しい服装、小兒の方だとして、愛嬌なく云へば随分物欲しさうな丹精揃ひ、お祖母さんと孫とであらうが何者の親や子か、彼のシヤナシヤナした頸首の細く白い綺麗な男の兒が、行末何うなるのであらう、彼の子の母と云ふ人は、齡より老けて末枯れた顔に、白粉を無理に附けて暮らして居るのではあるまいか、などと、わたしは續けて餘計な事を考へた。

雲の隙間の碧空から赫と映した初夏の日の光は、迂潤して居たわたしの目に

も眩かつた、寄せ來ては岩を呑む浪は、凄まじい唸を立てながら、やはり足下に小山の如き白泡を吐いて居た。

わたしは何とも無しに立上つた、而してフラくと山から濱へ、犬若の漁村を犬吠の方へと歸り始めた。

砂地へ引揚げられて居る船は、黴い、それでも、大濤の上に弄ばれて居る小舟はあつた船乗に取つては此の水より外に懐しいものは無いのであらうか。

早漁師街の家續き、濱の眺は些と狭小しくなつた時、不圖目前に一本の扇の落ちて居るのを看付けた、取上げて開けて見ると、兩面とも金地の女扇、片側に彩色で小さく撫子を畫いてある。

何れ犬吠に來て居る女客の落物であらうが、氣味の悪い今日の天氣に、何様な物好きな人が爰等へ遊びに來たか、何しろ拾つて行つて見やうと、扇を懐に入れて一町許も行く、左の岸の漁師街の石段から此の濱邊へ、彼の老人と

小兒とがウロ／＼と降りて来た、落物を捜して居るらしい、小兒は何か泣聲で云つて居る。

「落物ですか。」

とわたしは聲を掛けた。

「ハイ。」

とお婆アさんは上の空の返事。

「扇子ぢやありませんか。」

と云ふと、エ、と云ふ小兒の聲と、ハイと云ふお婆アさんの聲とは一緒である、二人はわたしの顔を見詰めた。

「女持のお扇子なら、今其處でわたしが拾ひましたが。」「マア左様で御座いましたか、有難う存じます、あの、金に撫子の畫が描いて御座いますので。」とお婆アさんは歡喜に聲も狼狽へて居る。

わたしは拾つた處の邊を指した其の扇を、お婆アさんに渡さうとすると、小兒が横から撈ぐやうに受取つて、

「有難う、あたし是れを失すと大變なの、大事なお扇子なんですから。」と幾度か丁寧に頭を下げる。

「急に此子が歸りたくなりましたして、沙原を宛然駈けるやうに急がせられましたもので御座いますから。」

とお婆アさんは自分達の粗忽に就いて辯解をしながらも、ホツと太息の喜び顔、わたしは大抵にして別れた、途中で二三度振り返つて見たが、先の早足には似ず、二人の影はなかく見えなかつた。

昨日の忌な天氣は己は知らぬと云つたやうな今日の快晴、活動寫眞の連中は朝飯が濟むと直ぐ支度に掛かり、十時頃にはゾロ／＼と旅館の庭から波打際

へ出る、他の客は殆ど總出の見物、珍しくないと云ふ女中さへ、尙且珍しきうに縁側に總立となつて眺める。

「旦那も行つて御覽になりませんか、此の前の岩の澤山ある處と、彼方の岩の少い方とで撮りますのださうで御座います。」「明日は燈臺の下の處でも寫すんで御座いますツて。」

と隣の座敷を持つて居る女中までがわたしに勧めて、馴染だけに草履を出してくれた。

「今其處へ行つた綺麗な女は何者だい。」

とわたしの方の女中に訊くと、

「あれが座頭なんで御座いますツて、宛然本當の女で御座いますね。」「わたしの訊くのは本當の女さ、ハイカラに結つた三十格構のが、寫す連中の後から行つたらう。」「ア、あれですか。」「あれですかツて云ふ奴があるか。」「ホ

ホ、御免下さい、お馴染でも在つしやると大變で御座いますね。」「馴染なら訊くものか。」「デモ白ばツくれて。」

立並んで居た四五人の女中は、今は特別だと云ふ料簡の遠慮もなく、奉公人氣を離れて一齊に高くアハ、と笑つた。

其の中から一人、わたしには顔馴染もないのが斯う云つた。

「其の今のアレは、芳町の藝妓衆で、立女形の人の、ね、ださうです、雷様の鳴つた日に、一人で後から入らしたんです。」「それで、座敷は二人で居るのか。」「何うですか、其様に氣におんななさるなら、本館の方から番の女中を呼びませうか。」「それが又美人だと尙氣になるから止さう。」「爰に居るのは皆氣にならないのばかりで相済みません。」

又一同して笑ひ騒ぐ。

其の中活動連も見物も段々遠くへ行つたらしく、わたしの居る座敷からは、

此の大舞臺の芝居の模様は全く見えなかつた、首を斜に長くして居た女中達は、長廊下の中央に構へて居る取締の小母さんに聲を掛けられ、忽に其の首を縮めて散りぐくに立去つた。

昨日扇を落して涙ぐんで居た小兒は、波に攫はれる處でも寫して居るのであらう、紳士、夫人、令嬢、書生、女中、車夫、漁師、其の子供等、三十人近くは此の白晝の濱邊に白や赭の顔を天日に曝して、泣いたり笑つたりして居るのであらう、と思ふと、可笑くもあり、何だか悲惨のやうでもあり、わたしは遂に海岸へは一步も踏出さず、やがて裏の松原の方へと出掛けた。

晝飯に歸ると、活動連も今恰ど一齣濟まして引揚げて來た處、彼の芳町のも、假髮のハイカラ美人と並んで歸つて來た、旅先へ追駈けて來るも好いが、此の日中をゾロ／＼と一緒に附いて歩くとは、好い業曝しだと密かに思つた、決して妬くのでは無い。

わたしは病氣で夜睡れない、仍て晝寢でも爲て見やうかと、枕を持つて來て貰つてゴロリとなると、牛になりますよと女中に笑はれた、然うもあらうか、晝飯の濟んだのが一時頃で、今はまだ二時前だ。

努めて睡らうとする程尙睡れない、浪の音が珍しさうに耳に着く。

活動寫眞の役者、あれも役者だ、上手な人も居るけれども、遂に本場では無い、あの一團の人、あの藝妓、などよ、又しても下らぬ事を考へて居る時、廣い旅館の其處此處を、

「賢ちゃん、オウイ。」

と云つて、人を捜す聲がする。

「賢公やアい。」「迷兒やアい。」

冗談半分怒鳴つて歩く男達、何うしたのだと女中に訊くと、午後の撮影に掛からうと云ふ今、肝腎の子役の立者賢ちゃんが居ないので、一同大困り、附

人のお婆アさんも皆々の手前大まごつきであるとの事、偕こそ昨日の兒が立者で、名を賢何とか云ふのであらうが、寫眞を撮る先に立つて居なくなるとは、藝に賢くても尙且小兒と、わたしは賢ちゃんの昨日の顔を日の中に泛べて居ると、光線の工合が悪くなる、時間が後れると、係の者は怒鳴り出す、それがやがて静かになつたと思ふと、海岸へ多くの人、今度は旅館中がざわつき出した。

薄藍に薄黄に草色に、海の面は段々染に暮れ掛かりて、風の漸く冷つく頃、賢ちゃんは燈臺下のゴロ／＼岩の岸に、死體となつて漂つて居たのを發見された、引揚を終つた時に、其處の岸に賢ちゃんの大事にして居た金の扇の浮かんで居たのが又看付かつた、では、扇を落した途端、拾はうとして自分も落ちたのではあるまいかと云ふ事にはなつたが、何うして一人爰まで遊びに

來たかといふのが一寸分らなかつた、宿から爰までは四五町も離れて居る。其の中斯う云ふ人が現れて來た。

「此の兒は先刻岩の上を飛んで歩きながら、首だの手だの振つて芝居の稽古をして居た、それから少し経つて、岸の處を泳いで居た。」

と、これは燈臺傍の茶店の子傳女の話である、浪に攫はれる役を勤める程の賢ちゃんには、愁ひ水心があつた爲、落した扇を拾はうと、岩打つ浪の割合に高からぬ此處に入つて泳いだのではあるまいか、役のまよなる横縞のメリヤスのシャツに猿股、身輕なのが無端そんな心を誘ひ出したのでもあらうか、と評議は種々、各旅館の客達の噂は囂しい。

わたしの宿の騒動は言ふまでも無い、彼のお婆アさんは、狂氣の如くと云ひたいが、可哀想にボカンとして、口も利けず唯ウロ／＼として居るばかり、却つて全然の他人の衣裳屋の婆アさんの方が、返らぬ事を繰返しては泣いて

居るとか。

わたしは何とも云へぬ心地になつた、扇を取らうとして死んだとより外思はれぬとの衆評の、それが若し本當として見れば、昨日拾つてやツた金の扇、あれ故にあの兒は命を落したのである、あの扇を何うかした機にわたしが沙の中へ踏込んでよも了つて居たら、賢ちやんは今日死ぬやうな事は無かつたらう、扇を昨日拾つて渡されさへしなければと、お婆アさんは定めしわたしを怨んで居やう、とわたしは此の賢ちやんの死を自分の罪のやうに怖ろしく思つた。

これを失すと大變、大事なお扇子、と云つて、お婆アさんに渡さうとするのを横合から取つて、幾度かお辭儀をした賢ちやんの顔は、わたしの目の底に今となつて深く泌みて了つた。

撮り残しの寫眞は、代りの子役の顔を成るべく見せないやうにして少し働か

せ、何うにか遣繰つて仕上げる事に相談決着、檢視濟みの死體は、幾間も借りてあつた其の中の一室に容れて、銚子から棺の來次第東京へ送る事になつた、と聞いたわたしは、此夜十二時近く、他の旅客の寢鎮まつた處で、賢ちやんの前にお線香の一本も上げやうと思つて、密と其の室へ行つて見た。

明日は忙しいと云ふので、一同は最早部屋々々で床に就き、亡骸の側には、彼のお婆アさんと、衣裳屋の婆アさんと云ふのらしいのと、ハイカラの藝妓と、斯う女三人だけが坐つて居た。

わたしは心ばかりの香奠を出した、お婆アさんは黙つて取つて押戴き、「あなたとは能く／＼深い御縁と見えます、姐さん、此の仁が昨日扇子をお拾ひ下すツた。」

と云ふは果して昨日の事が人々の間に話されて居たのであつた。

「左様で御座いますか、此の兒も可哀想な事を致しましたよねエ、斯様な扇

の一本ぐらゐるで。」

と云ふ其の美人の膝の上には、今押開かれたる金の扇、撫子の畫は地紙と共に損じて居る。

「餘程大事な譯がお有りだったのでせう。」

と訊けば、良有つてお婆アさんが、

「表面他人のやうになつて居ります此子の阿母が、去年自分の形代同様に、態々其の畫を描かせて贈つてくれましたので。」

と指す扇は疊まれて了つた、わたしは何も云ひ得ず、お線香を上げて直ぐ様我が室へ戻つたが、此の夜は終に睡れなかつた。

折角養生旁々遊びに來たわたしは、變な心地になつて、次の日急に東京へ歸る事とし、故意と賢ちやんの棺を乗せたのと同じ列車に乗つた處が、棺の見送人と云つては、活動仲間からは一人もなく、哀なる子役の立者は、亡父の

生之母だと云ふ彼の六十幾つのお婆アさんに伴はれて、それも車室を別にしないで、十一歳を一期に、暗い夜を生れ故郷へ還るのであつた。
お婆アさんを二等室に、わたしと向合はせに坐らせたのは、其の隣に並んだ彼の年増の藝妓であつた。

穴賢祝儀無祝儀

人皇一萬八千代、天が下の諸國入れ交つて大戦の頃、京鎌倉の岐路を九十里許下がつたる所に、尾暮足人と云ふ男住みけり、此の者、面炮の合の手に女を摘まみなどして居ける若盛には、鍼に刺されし姐板の鰻と其の頭の新らしさを競ふ程の、生きの好い人間の走りなりしが、駈抜けて行く白駒の足埃に汚されて、額から何時か寂が付き、孝行になれよとはあらねども、態と文字を好みて新子と名けし惣領娘を、三十だから最早徐々と嫁に遣らうかと

思ふ時分には、智慧も身代も髯唐人の日本扮装悉皆と左前になり、やうく、看付けし縁談の口も龍の口ほど御難の顔色。

「モシくあなた、と云つて亭主を龜の子扱ひにする譯では御座りません、何でそのやうにお鬱ぎなされます。」何うせわしは龜の子さ、弱り切つて手も足も出ない所が、お子供衆のお慰。」娘があなたを持遊に致しましたか。」

「嗟乎お前も足の利かぬ挽物細工、餘り氣が廻らなさ過ぎる。」

足人は女房波瀬子に愚痴の有り丈をはなし龜、くどくと云ふは此の事なり。「何その苦勞に及びませう、芝居の廊下の歩き振が氣に入つたとて、多田惟武ともあらう物持の旦那の懇望、わたしが必と纏めます。」「兎角世は女の事だ、宜く願ひ鯛の味噌吸。」「然う古くなると通人と云はれます。」

娘も可愛ければ自分達も可愛く、波瀬子は方々駈廻つて、先づ女の働と云ふものからして見せに掛かる。

「何うだなく。」「イヤもう、歩いて見ると何も彼も早いものづくめ、山の芋の蒲焼は未矣、婚禮には雀の吸物、大病人には石屋の切手、調法も亦此上なしで御座ります。」「調法に不思議なし、ドレわしも見て来やうか。」

何時も眼水晶見透しのつもりの足人、腫を据ゑると是れはくなり。

世の中の諸事萬事、早いと手軽に越す事なし、飯を食つて茶を飲むなどは大時代二度の手間、茶で飯を炊いて食べれば一遍で用が済むとて、此頃は茶飯といふ物大流行にて、商人の賣聲まで黄色く、サア評判のティーライスく。

それにしても婚禮の方の事は何うあらう、茶を飲んで湯で飯を炊き、湯うライスも氣が利かないと、氣よりは寧ろ融通の利かぬ足人、支度萬端入費の處を段々と調べしに、如何様女房の話の通り。

身分違ひの人の婚禮には、假親假媒人などに立つ家業の者あり、位倒れの殿上人、大官人などにて、儀式當日參會賃何程と前金にて雇はるとなり。

儀式の場所としては、出雲國に新勸請の太神宮様の出張所諸所に在り、人これを借りる。

神殿の隣の棟には、衣裳持物履物などの見せ場あり、それぐの商人出張りゐて、上中下一組若干づゝと損料ならぬ見料を取りて、好みの通り飾立つれば、嫁も婿も支度に大金を掛けるに及ばず、着たり脱いだりの手間も要らず、斯う着飾つたものとしたら嘸立派であらうと、思つて貰ふ料簡にてやがて神前へ打通る。

固より三々九度も里歸も披露も残らず一遍にて済ます掟ゆゑ、係合の人をズラリと並べ、直ぐ折詰と吸物を出し、椀に手が着きしと見れば、神前に神主土盃を高く捧げ、お開きと云ふを合圖に一同ドカく退散する其の段取の鮮さ、茫然した人間は、來たのと歸るのが分からなくなる。

折詰を提げて戻り、俵紐を解き紙を退ければ、新夫婦が旅先にて睦まじさう

に遊びるところを寫せし繪紙が出て、これに祝物の禮が書入れてあると云ふ工夫。

「其の繪紙の似顔をよく覚えてさへ置けば、途中三途で逢つた時、挨拶を仕損はないとは、巧い案じで御座ります。」「嗟々、世の中は三日見ぬ間の櫻肉、泡を食ひく、鼻嵐を吹くやうな料簡で渡らねば駄目だ。」

足人夫婦は溜息を吐いて感心し、下の上ぐらるのお極まりにて、やがて娘を惟武方へ嫁らする。

多田は滿仲以來の福々にて、當代の主も先祖の名を辱めぬ甘さなれば、戀女房を貰ひし日より言ひなり次第、赤い長襦袢、青い襟、黒い羽織、白であらうが黄色であらうが、値段の高い物ばかりを體に巻付けさせ、配色などを關はねば、色本帳に魔の魅したやうなものを、誰が極めるともなく多田新子とぞ言ひならはしける。

偕も其の後足人は、愁ひ浮世の風に當たりしが基となり、落膽やら吃驚やらに安心も手傳ひて、ドツと病の床に就き、外科本道は盛つてゐても、此方に代が無ければ痺の呪になる芥ほどの役もせず、娘の方より焼場の切手を呉たるを、嬉さうに握り締めて或日の夕方、足下の暗くなつた頃遂に往生したりけり。

「母さん、父さんの病氣は自業自得、餘り俄に當世の眞似をして、お茶飯ばかりを詰込んで、湯水の濕りをくれなかつた故、此頃流行の鵜呑病の下地となつてあの始末、昔は彌次が無駄言ひに出る。」「コレく、親の死んでゐる枕邊で、鼻唄を唄ふと云ふがあるものか。」「それでも道理と人情とは別つこと云ふが當世で御座ります。」「何しろ最早片付けずばなるまい、何處ぞの寺から競つて來さうなものだが。」

尾暮の家の身内に、何か時々して見たがる男あり、藥石効なくと書いた散ら

しを無闇と拵へ、映繪の引札のやうに辻々にて往來の人に配りしは、葬式に些と景氣を附ける目論見なりしが、そんな事は三年三月も前の事だとして、誰も相手になる者もなき中から、唯一人相手になりしは、殺してくれた醫者様なり。

「藥石効なくとは何事で御座る、藥とは病に利くもの、利けばこそ藥、その藥が病人に効のない道理が御座らぬ、足人殿が歿られたは、藥が利かぬからではなく、死ぬ程の病ゆゑ藥が無駄になつたので御座る、あゝした事を吹聴されては、手前一代の名に關はります、サア此の始末は何うして下さる。」

名利の爲には醫者も辨天小僧のやうになる。

「一寸凄味は見えますが、此の辨天の藥が何うも利かすの助は、飛んだ事わやで御座ります。」

小聲で隅から交ぜるもあり、少しばかりゴタ／＼はしたりしが、口に物は要

らぬからとて、これには惟武の扱ひあり、偶に飯炊の藥ぐらゐるは盛らしても呉やうかと、醫者は多田の身代に免じ、仲裁の顔を立てと事済となる。

愈葬禮の段となれば、酒肴欲しさに誰も通夜だけは無駄と云ふ者なく、ワヤワヤと賑かに一夜を明かす。

「娘の婚禮が此の半分賑やかであつたならと、太神宮様の事を思出します。」

「太神宮様と云へば、お神棚へ櫻紙を貼つたのは誰だ、勿體ねエ。」「何處のお年寄だか、飛んだ御苦勞だ、爰の家には神棚のあるのがまだ殊勝さ。」「櫻紙とは氣が利いてゐる、神は見通し。」

新後家の愚痴から神様が揉みくちやの成行とは、障らぬ神も崇られる味氣なさ、これでは何誰も縁結びのお手助までなさる筈なり。

「サア／＼葬式、用意は好しか。」「競り落したのは何と云ふ寺だ、何宗だ、亡者を引取りの坊主は來てゐるか。」「ハイ／＼、車を持たして参りました、

寺の名は深潭寺、宗旨は兼學宗で御座ります、ハイ、手前は住職志召星太郎と申します、取急いで参りました爲、斯くの如くの亂鬢、幾重にも御容赦。「それでは一番積出さうか。」「行列は無し、お經は無し、イヤ積菓子も無し歟。」「菓子は引換切手にして、悔みの禮狀の中へ封じてやツた。」「それは感心、走りく。」

餘りの手早さに波瀾子は少し案じ出し、引取りの住職に様子を聞訊す。

「モシ星太郎様、一體何う云ふ事になるので御座ります。」「此頃寺方とお取引がないゆゑの御不案内、決して御心配なされませぬ、寺の方にはチャンと掟が御座りまして、朝の間は幾何、午からは幾何、夜に入つてからの幾何と、仲間の相場が立つて居ります、お經の處も、外々の亡者のと込みならば何程、別聽なら何程と、ハイ、別聽と申しますと、手前共の方の符牒でお座敷と稱へて、別段丁寧に一人に讀んでお聽かせ申す事で御座りま

す、イエ講釋では御座りませぬ、何宗なりともお望みに任せますお經で、ハイ、七日々々も前金に戴きますれば、度敷切手と申す割安の札を差上げます、四十九日まで七枚綴一册何程、百ヶ日まで何程、もつと長いになりますと、年忌々々までの御座ります、ハイ、つい先頃、此の度敷切手を景品に致し、僧侶用語と申すのを俗家から集めました中に、お焼香を略します、と云ふのがあつて、一番ヤンヤで御座りました。「それでも兎に角、お經を聞きに来る會葬の仁はあるので御座りますな。」「此方から先様のお宅へ人を廻らせて、帳面へお名前をお貰ひになれば、當日寺が靜かで兩爲で御座ります、寺の座敷で膝詰の禮狀などは、もう今時流行りませぬ、そのやうな事は、頭の丸い坊主が後家を狙つた時分の智慧で御座ります。」「何うせわたくしのやうな後家は、お寺様でもお使途にはなりません、御境内の新開には、定めて藝子屋も澤山に御座りませう。」「これは恐れ入谷の墓所、何うも

ギツチリと詰まりました。「ヤイ〜、下手の長談議、引導と無駄の長いのは大義なものだ。」

側から腹を立つもあるゆゑ、慌てと葬式を済ませたる尾暮波瀬子は、もう追つ付かぬと此の時浮世に見切を付け、昔々の話に聞きしカチ〜山の其の奥に引籠り、竹の柱に茅の屋根、近頃は金物が高いからとて土鍋提けての寡婦暮らしに、娘の方から音沙汰もなしの礫は、戸隠様でなければ詰まらず、此の本文も詰まらず、不目出たしく。

端唄茶話

端唄には名文がある、謡曲などの比ではないと、中江兆民居士から種々話して聞かされた事がある。それ程であるか何うかは僕には解らぬが、兎に角、端唄の中には、戀とか色とか云ふものを、僞なく唄つてゐるのが少くない。變な掛調や縁語などの、字面の綺麗なのばかりを心意氣だと思つてゐる當今の通人には、或は俗で恐れべかも知れぬが。

「一言が十言に向ふ嬉しさは、忘らりよものか忘れぬ、嘘にも惚たを實にし

てエ、暮らすエ。「惚れば斯うだ。嘘にも惚たを實にしてが有難い。

「春雨に口説途切れて唯くよくくと泣いて居るのを寢た振に、寄る術もなき女氣の、癩が取持つ中直り。「何うも云へぬ情景、何も彼も浮上がって見えるやうだ。

「更けて逢ふ夜の氣苦勞は、人目をかねて格子先、互に見合はす顔と顔、目に持つ涙袖濡れて、エ、意地悪な火の用心、話す話も後や先。「お察し申すに餘りある。

此唄も亦黒人の自烈たさ。「鳥影に鼠鳴して駭られる、これも苦界の憂さ晴らし、愚痴が飲ませる冷酒は、辛氣辛苦のア、苦の世界。」と古い本には斯うあるが、近頃の哥澤の本などには、終が「辛氣辛苦のア、癩の種。」とある。前に「苦界」とあるので態と逃げたのかも知れぬが、「辛氣辛苦」と來たら、「苦の世界」の方が据りが好い。直した方は僕等にとつての癩の種だ。

苦界にはまだ好いのがある。「心で止めて歸す夜は、可愛男の爲にもなると、泣いて別れて又御見もじ、猪牙の蒲團も夜露に濡れて、後は物憂き獨寢するも、爰が苦界の真中かいな。「近頃は「御見待つ」となつてゐるらしいが、前の程の相違はない。

「草も寢沈む夜もすがら、枕一つに寢もやらず、起きも直らず又片思ひ、逢はぬ人なら知らで濟む、心ばかりがエ、罪のもと。「逢はぬ人ならと云ふ愚痴が身上だ。

愚痴を平凡に並べて、それで戀する人の眞情を得てゐるのは、「浮名立てじと口先で、態と貶して或時は、胸で惚話して知らぬ顔、噂するさへならぬとは、ほんに蒼蠅い人の口。「唯其の通り其の通りと云ふべきだ。

花鳥風月其の他俳諧の季寄にあるやうな景物の小道具を取込んだのには、概して身に入るのが少ない。綺麗事にも意氣事にも聞えはするが、文字を弄

んであるだけ其處に人情の眞實が缺けてゐる。にも關らず、流行りものには其の薄つべらの唄が多い、多少節附の關係はあるとしてもだ。端唄には俳句と和歌とが大分使はれてゐる。鶯の身を逆様に初音屋の「逆しまに初音かな」を拜借したのなる事云ふまでもないが、「初音屋」と終の「梅見草」との爲に、其角の句も仰山だ。「むツとして歸れば門の青柳に」は、落語にもよく出る。「門の柳かな」の拜借。「我が物と思へば輕き傘の雪」も、「一聲は月が啼いたか郭公」も、「起きて見つ寢て見つ待てど使ひなく、蚊帳の廣さに唯一人」も、「行末は誰が肌觸れん紅の花」も、「今鳴るは確上野か淺草か」も、「葉櫻や窓を明くれば山郭公、又も啼くかと待つ中に、鯉々」も、「夕立や田をみめぐりの神ならば」も、「君は今頃駒形あたり、啼いて明かせし山時鳥」も、「朝顔に釣瓶取られて」も、皆發句の生擒若くは翻譯だが、和歌の方は、字數が多いだけ、これは手際よく引用されてゐる。

「逢ふと見し夢は空く覺めて又」は、「逢ふ事は夢の中にも嬉くて、寢覺の戀ぞ佗しかりける。」だの、「戀ひくつて逢ふとも夢に見つる夜は、いと寢覺ぞ佗しかりける。」だの、「逢見ても効なかりけりうば玉の、果敢き夢に劣る現は。」だのと云ふ古人の歌の心だ。取入れたとは云はぬが、持つて行き處が同一だ。「後朝の別に空も雨誘ふ、蟬と螢を秤に掛けて」は、和歌に斯う云ふのがある、「音もせで思ひに燃ゆる螢こそ、なく虫よりも哀なりけれ。」
「秋の夜は長いものとは眞ん丸な」は、「秋の夜を長きものとは星合の、かけ見ぬ人の云ふにぞありける。」と酷似してゐる。「君來すば閨へは入らじ柴の戸を」は、「君來すば閨へも入らじこむらさき、わがもとゆひに霜は置くとも。」の上の句と殆ど同様であるが、これと酷似た唄出しのが、朝妻檢校作の上方唄にもある。「薄墨に書く玉章も思ひして、雁啼き渡る宵闇に」と云ふ唄、これは古い本には、「玉章の」とあるが、本歌は、「薄墨に書く玉章と見ゆる哉、霞め

る空に歸るかりがね。」

「花の曇り」の唄にある「内や床しき内ぞ床しき」は、云ふまでもなく彼の鸚鵡返しの小町の歌の趣だが、初めの、「遠山の雲か花かは白雪の」と同じ様な歌もある。「白雲と峯には見えて櫻花、散れば麓の雪にぞありける。」

「惚て通ふ」の中に、「闇の夜道を唯一人」だの、「山を越えて逢ひに行く」だのとあるは、「風吹けばおきつ白浪たつた山、夜半にや君がひとり越ゆるむ。」と云ふ、落語の方にも引合に出てる、彼の古今集の歌の心からだらう。「浮草は思案の外の誘ふ水」の唄も、「佗ぬれば身をうき草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。」からに違ひない。

「宵に待ち夜中は焦れ曉は」と云ふのや、「春雨」の「鶯宿梅」やは、一々云ふにも及ぶまい。「わが物」は冒頭が發句で、胴中が歌の、「思ひかね妹許行けば冬の夜の、川風寒み千鳥なくなり。」太い寄合ひ身上だ。

「花に鳴く鶯」は、古今集の序の文句なる事勿論。「いづれ降る去年見し雪にあらねども」は、唄の中にもある通り、謠曲の「鉢木」から來たは解かり切つてゐるが、「されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども」を捏ち替へてあるのだ。又謠曲の「高砂」の一節の丸取もある。又和歌なり謠曲なりに縁のあるのは、「駒とめて袖打拂ふ陰もなし、佐野のわたりの雪の夕暮。」を少し變へて初めに使つたの、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花やこよひの主ならまし。」を同く一寸更へて使つたのなど、随分洒落ツ氣のある方だ。「遠くして近いが色の習とは、清女が筆の綾瀬川」と來ると事が面倒になるが、「駒とめて」の最明寺の方の唄には、「明鴉」と云ふ名があり、「行き暮れて」の薩摩守のには、「朝櫻」と云ふ名があり、清少納言のには、「關屋」と云ふ名があり、揃ひも揃つて唄ひ出しの呼名では承知しない處が珍だ。

出所の可然らしいのは、「巷々の青柳さへも、あれ春風が吹くわいな、わたし

の心の遺瀨なや、思ふお方に知らせたや、よいくよいくよいやさ、それエ。の唄。これが唐詩選にある「陌頭楊柳枝、已被春風吹、妾心正斷絶、君懷那得知」の翻譯とは、物好きの割には拙い譯だ。

「名にし負ふ富士と筑波の山合に」と云ふ唄は、河東の助六の「傘に積もりし山あいは、富士と筑波をかざし草」と似てゐるが、河東の方のは青傘の縁で山藍と云ふのもあらうか。「山合に露の情の一夜妻、色もほのめく千草の里へ」とある唄の方のは、草の縁でか。

諸斯う長々と並べて見たが、唄として眞實のある、或は色氣のある、一寸好いのは尙可なりあつて、「口説して」、「變らじと」、「羽織隠して」、「悟氣らしいが」、「可愛男に」、「風誘ふ」、「ほんにまア」、「親の譲りの」、「浮氣同士」、「來るか〜と冷酒を」、「待宵は」、「雨の降る夜」、「戀と云ふ字」、「舟ぢや寒かる」、「今朝のなア」、「粹な浮世」など、何れも相應に面白いが、多少の可笑味の交

つてゐるのでは、「愚痴も出る筈」、「藝者商賣」、「逢はぬ夜の」、「逢ひたさに用なき門を」、「雪はしんく〜」などが好い。

端唄は一體に寸法の短いのが禍となつて、替唄が澤山にあるが、本唄の意に因つて手を附けたものへ、外の文句を押し附けて、字數や口調が同じだから唄へるだらうと來ては無茶だ。其の替唄が盛んに版行にされた時代に在つても、通は替唄を口にしないものとしてゐた。逸けてゐるのではない、正當なのだ。

此頃端唄の文句を改良して、これを家庭用の音樂に爲やうと云ふ計畫がある、馬鹿の行止りだ。

立者貧弱揃

落語家の言ひ種にも、綺麗な男の事を役者の様だと云ひますと云ふ。年中塗つたり剥がしたり、我が顔ながら扱くり引廻してゐるに因つて、其處は自然と垢拔がしてゐる。餘り然うでもないのもあるが、大抵は何處となく素人の膏切つたのとは違つてゐる。唯の野郎で打遣つて置けば、芳町の浮浪人と紛らほしい様なのも、御方便なもので、一旦役者と名が附くと、何だか然うらしく見えもする。如何様役者は好い男だらけである。

就中、若手とか花形とか、少しでもワヤ／＼云はれる徒には、随分目の覺めるやうな美しいのがゐる。目は覺めぬまでも、半寢惚になるぐらゐるのは可なりある。濟々たる美士御婦人以て殆しと謂はねばならぬ。

其處で、われ等素人、羨の眼を八方に放つて、濟々たる右好男子の垢拔諸君を更に熟々視るに及んで、多少の文句なき能はずとなる。口惜紛れと吐かさば吐かせ、一番ケチを附けざるを得ぬ。

役者は體を資本にする業體である。梁の高い、間口の廣い、舞臺と云ふものの上で種々な藝道をする商賣である。遠い處からも高い處からも、澤山の眼で見らるゝ藝人である。美しいのが結構であると共に、立派でなければならぬのでもある。綺麗で立派、これが本當の役者の美男子好男子なのである。然る處にだ！

現に大正七年の今、大小劇場十幾座に出勤の東京役者の柄を見渡すに、素人

の唯の男としては、世評の通りお美しいのが相應に居らせられる。而して所謂
 みいちゃんはやんはアちゃんの涎の種とはなッてる。けれども、立役にでも女形
 にでも扮装させて、これを廣い舞臺に押出し、サア何うだ見てくれ、立派だ
 らう役者らしからう、と云ひ得られるのが何れ程ある。立者に相違無御座候
 と云へるのが先ア幾人ある？
 眼付が好いの、鼻筋が通つてゐるの、口元が可愛い、色が白いの、と云つ
 て見たところで、膝組に鼻を突合はしてだけの美しい男では有難からぬ。賣物
 として決して優れた結構なものでない。何處から見ても立派でなければ駄目
 である。
 日本人全體が、段々小粒に貧弱になッて來たのでもあらうけれど、役者の柄
 も段々と貧小になる。明治になッて此來でも、立派な役者は追々減つて、見
 るから哀な様子のばかりが殖えてゐる。

立派なのが下廻りにもないから、それが出世して伸し上がつても光らぬ。親
 や師匠のお蔭で光る立者にも、身分相應地位相應の立派なのがゐるゆゑ、兎
 角舞臺が引立たぬ。
 下廻りは儲措いて、今の立者の多くの貧弱さ加減、實にお話にならぬのであ
 る。考へると涙が翻れる。美しい男も醜い男もあつた事歎。
 何百人とゐる東京役者の中で、舞臺へ出して大立者らしいのは、歌右衛門、
 仁左衛門、源之助、幸四郎、梅幸あたり迄。次いでは小團次、歌六、八百藏、
 左團次、訥子、それから宗十郎、段四郎、秀調、彦三郎あたり。外は何れも
 子供々々してゐるか又は貫目の見えぬのばかり、立派と云ふのは儲妙い。
 年齢の關係からしてまだ實が入らず、若手とか花形とか云はれてゐる彼の濟
 濟たる美男子諸君、これが何年経つたら立派になるのか。技術で柄は補へる
 が、名人九代目團十郎さへ、もう一寸身長が欲しいと度々自分で云つたと聞く。

細く、低く、小さく、何處から見ても貧々弱々たる今の若手とやら花形とやらの御連中、これから育つ齡でもないが、行く／＼は何うなさる思召にや。若手と云はれ花形と云はれても、實は大抵女房子のある父ちやん小僧。今の儘で四十を越し五十になり六十に手が届いたら、嘸かし不思議な者が出來上がらう。貧弱諸君の將來は、決して幸福なものではない。連中の二三本もあつて、何とか云はれてる中に金でも溜め、老後の計を早く今からして置くが肝腎である。それでなければ、柄行の好い養子でも貰つて、立者製造をやるに限る。

と一應は蹴つ貶して見たものよ、今の芝居見の大部分は、立派な團十郎も菊五郎も左團次も團藏も芝翫も知らず、松井須磨子と六代目とを知つてゐれば、新舊のお芝居辨へざるなしと、悉皆安心してゐるのゆるゑ、此の一眼國の住人には、愁ひ二つ眼のある人間は見せぬ方がよいかも知れぬ。打遣つて置く

見せ物に出し兼ねない。

寫實々々、何事も吾人の實生活に觸れてゐねばならぬ。徴兵検査の寸尺から考へても、立派な體格などは虚偽である。顔の道具の立派など亦不必要である。世間には醜い男醜い女の方が多し。吾人の知れる限り皆然りである。と追々には斯うなりさうな雲行なれど、今の處はまだ然うでない。立派な役者の必要がある。それなのに太甚乏しい。立者の標準下落、看客の眼識低下。イヤ愚圖々々云ふのが痴者であらう！

豚　兒　亡　劇

大劇場の大幹部より、中劇場の青年幹部に至るまで、近頃では皆相應に子を有つてゐる。而もこれが御方便で、大抵男のお子さんである。イヤ、男の子でない、自分即名優の後を繼がせるに不都合とあつて、實子がなければ無いで何處からか能くも搜して相應なのを貰ひ込む。多兒濟々眞に御盛んなりと謂ふべしである。

蛙の子は蛙であると同様に、立者の子は立者である。親が相當な名題役者で

ある以上、其の伴は坊つちやんである、若旦那である。涎くりでも子太郎でも、弟子や男衆が崇め奉つてホイ／＼云ふ。最眞の客までが一緒になつてチヤホヤ云ふ。變通人共から茶目など云はれるを、お坊様の代名詞鷹揚の證據の如く心得て、當人先づ伸張り反れば、親馬鹿亦眼尻を下けて無駄を手柄の顔面。厄介者の寄り集まりである。

芋棒と云ふ食物のある昨今、地方趣味輸入で大棒など唱へて、大根と棒鱈の煮付も、紳士貴婦人、一流の藝妓達には向くか知らねど、假名手本忠臣藏の筋を知つてゐる人間に取つては、有難からぬ惣菜である。

何十人と數ある立者の御令息中、稀に麒麟兒鳳雛もある事とは思へど、小生寡聞にして未だ之を知らず。一二の猪兒を除けば、餘は皆式の如き豚兒揃ひである、トばツかり承知してゐる。

何が豚兒だと口を尖らすを休めよ。上は十五六、十七八より下は八九歳十歳

位までの立者の子に、何と云ふ役に立つのがある、何う確りしたのがある、立者の俵らしいのが幾人ある。お氣の毒様だが大抵ヨタものばかりでは無いか。

實地の稽古の必要から、小學校へも満足には通ひ得ぬ、と云つて庭の訓が行届かうでもなき俵殿、空々寂々、半玉と巫山戯る事を覺えて、色氣附いて、聲變りがして、而して通人に仕込まれて、不良文士に新しい議論を聞かされて、鮪の刺身をカツレツにしたやうな、一種不可思議な俳優に出来上がる。氣味の悪い事夥しい。

それも子供は親次第であるに因つて、當人達に先ア罪は無いとして、それで平氣でゐる親共に至つては、眞に言語道斷である。

舞臺が少しヨタクリ歩けるやうになると、此の子供を初舞臺と稱して出勤させる。それも臺詞のない役とか、有つたにしても唯一言とかなら先づくな

れど、筋に係かつた臺詞を云ふやうな役をさせ、ドツ／＼と客を笑はせて場をメチャクチャにする。愛嬌と思ふ客は演劇を見せ物として扱つてゐるのであらうし、舞臺の俳優も自分達を尙且然う考へてゐるのに違ひない。舌の廻らぬ子役が、ハラ／＼するやうな事を云つたり演たりすると、先ア可愛い事と。こんな客は洋犬芝居か山雀の藝を口を開いて見てゐる方が好い。

ヨタ坊つちやん少し大きくなつて、十歳前後となると、興行毎此の俵に役の有無から詰問して掛かるが一般の立者氣質。然ればその立者が二三人四五人と鉢合せをする日になると、興行人は如何にして是等豚兒共を押片付くべきかと一苦勞。俵の形が付かねば、親父の立者、納まるべき役も納まらぬから怖ろしい。

上等な子役の出る一幕物を搜したり、子役の働く狂言を無理に拵へさせたり、興行人は資本を卸す人だけに馬鹿な無念な苦勞をする。豚兒の手習草紙に槍

舞臺の一幕を滅茶にする。それを周圍のおべんちやら共が、寄つて集つて嘍り上げる。親は増長するばかりである。

一人か二人立者の子があつてすら、随分一座には禍のあるものなるに、此節のやうにウジャ／＼豚兒が群をなしてゐては、各座の興行人の苦心、看客の迷惑、何とも早申上げやうもない。

俵を餌に親馬鹿を祭り込む事もあつて、然う一概にお茶瓶を邪魔がるにも當たらぬと云ふ場合もあれど、それは興行人側の都合による事。子役が伸さ張るからと云つて、別に苦情も云はぬ看客はこれも御勝手。横合から大きなお世話の次第ながら、少し眞面目に考へたなら何うであらう。

一般の看客が、狂言の脚色に不足を云つたり、一日の狂言の並べ方に嘲笑を與へたりする其の不結果の裡には、此の豚兒が何のくらくら禍してゐる事が多いか分からぬ。親達にして自ら耻ぢ願する所がなれば、興行人側に於いて少し

はビシリと行る事を考へねばならぬ。

立者の子立者の子と云つても、今の立者の俵の大部分は、拘々してゐて客つ垂で、卑くつて不行跡で、それで下手で生意氣で、カラキシ取る所と云つては無い。皆親が悪いのである。

こんな砂利に跋扈されると、芝居道は足も踏込めなくなる。豚猪などは根が大道のものである。

ズラリ見渡した處、眞に立者のお坊つちやんらしいのは大供に二三人あるばかり。太いものになると、小人國の老人のやうな薄氣味の悪いものもある。

昔には、今川了俊對愚息仲秋制詞之條々と云ふがある。劇界の衆愚息を詢ふると共に、衆愚親を戒むるに足る壁書でも書く人は無いか。

豚兒亡劇、これ決して洒落や戲言に云ふのではない。人の知る事少くして、其の害の實に多きものあるを憂ひて、斯くは憎まれ口を敲くのである。立者

の横暴は今やあらゆる方法によつて、劇界の裏面に行はれつゝある。

役者濫用

芝居道に弊風の多いは今始まつた事ではない、それを珍しさに言立小立をするのは、寧ろ云ふ方の善人さ加減を吹聴するやうなものである。けれども、其の弊風澤山の中にも取分け宜くないのがある。善い弊風と云ふのがあつては堪らぬが、近來益々烈くなる特別念入りの弊風がある。而もそれが芝居にも看客にも大迷惑を來すのであるから黙つてゐられぬ。

それは役者の濫用である。陳列窓式役割である。今少しく碎いて云はう。

近頃の芝居には、上に立つてゐる役者にのみ役をさせる悪い風がある。又、寺子屋で源蔵を取巻く捕手に、大勢の名題役者が出たやうな馬鹿な話もある。大和橋の侍に名題が出るとか、道成寺の坊主に大頭連が出るとか、これ等は所謂御馳走なり引立の爲なりで、舞臺面には勿論賑やかしとなる結構な附合、寧ろそれが御定法であるかの如き慣例であるが、愚にも附かぬところに仰々しく役者を並べるのは、害あつて益なき事と云はねばならぬ。前に云つた捕手の如きは、師匠の息が掛からねば、大歌舞伎の出勤覚束なき程度の役者でもあつたらう。本人達も亦、これでも勤めねば、一日中外に役がないやうな場合から、給金冥利先ア好いやでノコノコ出掛けたのでもあつたらうから、斯様な名ばかり名題の何うでも連の事は別としても、捕手にまで名題を出すから大歌舞伎だとの御自慢は御免蒙りたい。看客にも然う買冠つて貰ひたくない。高が廢物利用だ。

處が、此の興行師側の廢物利用が、芝居の上にも、看客の興味にも、何の效があらうではない。デモ名題でも名題は名題、心から捕方に甘んじてゐるのではない、彼等は忌々舞臺に現れるのであるから、ダラケてゐる、粗雑である、忌に役者がゐるのがある、實に嬉くも有難くもない。

太甚いのは、二三行でも臺詞のあるのは、駕籠屋までを名題にさせる。又阿容阿容と勤めもする。而して其の成績はと云ふと、上分あたりのよりグツと悪い。

仲間は仲間、駕籠屋は駕籠屋、下廻りには又下廻りの特色がある、少しでも身分の上の者なら、何でも少し宛は巧いと云ふ譯には行かぬ。ガラクタ名題濫造の弊は、軽い役の大部分を詰まらなくして了つた。

然しそれもまだ好い。捕方や駕籠屋を兎にも角にも名題と肩書のある役者にさせる關係上、名題下か新名題ぐらゐで澤山な役を、相應な名題役者の人氣

者にさせる、而して顔揃ひ役者揃ひと誇る。けれども出てゐる役者は溢々である、直な結果はない。

イヤ、それもまだ好い。一番困るのは、其の人柄でなく役所でない役を、無理に人気者に割當て、是非其の幕へ出て貰はねば、幾幕の間顔が切れるとか、折角の賣物を遊ばして置くのは勿體ないとか、論にも評定にもならぬ見せ物根性で、無理から役者を働かす事である。演る方は忌々の上に固より人柄でないから、成績は必と悪い。一座中には、見すく自分の役どこを、地位の上の人に取られて憤懣する者も出来る。興行師側の不料簡は幕内にも看客にも大損害を與へるのである。

デモ看客は何時かこれに馴らされて、重立つた役者が幕毎に顔を揃へてさへるれば、それが賑やかで好いと思ふ、それが爲に面白いのだと思ふ。手が附けられぬ。

興行師側に云はせると、イヤ然うばかりは云へぬ、現に新名題が好い役にも向かず、詰まらぬ役の用にも立たぬ理窟で、普通の名題役者即ち大一座の第一二流どこの人達では、舞臺が淋しい、客が喜ばぬ、何處となく技倆に不足の處がある、随つて好い役をさせても人氣にならぬと。

一應は道理のやうであるが、それは鼻下思案である。此方から悪い癖を看客に附けるから然うなるのである。役者は自分の役どこさへしてゐれば巧い、易い役でも人柄にないものには失敗する。松助が五代目の相手をしてゐれば名人で通り、本藏や瀬尾をすれば、唯の上手にもなり得ないので好く分つてゐる。現今は、上の人にばかり好い役をさせ、二流以下の人には其の特色を發揮させる機会を減多に與へぬから、當人に修行が出来ず、看客の目に残らず、随つて賣出しもせぬ。それを捉へて人氣がない、人氣にならぬから好い役をさせても駄目だとは、云ふ方が無理である、營利一方撫育の心が無さ過

ぎる。而して其の無理の徹つた結果が、看客は芝居を見ずに役者を見に行く事になる。四角張つて云へば、此の役割の不當、俳優の濫用は、實に演劇を毒するの大弊風である。

下廻り拂底

新相中、相中、上分、名題下、此の四種が、名題以下の役者の身分の總てである。お氣の毒ながら、爰には名題下から新相中ぐるみを一擲に「下廻り」として、其の不景氣さ加減を慨歎しやうと思ふ。

一口に役者のペエくを馬の脚と云ふ。其の馬の脚が一通りや二通りの難さでない事は、天下を擧げて劇通たるの今日、誰知らぬ者とてもあるまいが、一般下廻りの大切なる事も亦能く辨へて貰ひたい。

稽古辨當を食倒して歩くが特技の新劇團の如きは、残らず立者であると同時に、残らずが又下廻りであるに因つて、爰には全然勘定に入れぬ。新派の下廻りとても、治外法権の仕出しに跋扈するだけであつて、根つから舞臺の上に乗せぬゆゑ、これ等はネブ一挺別物として密と傍へ置き、下廻りの最も大切な歌舞伎派に就いてのみ、慨歎又慨歎と出掛けるのである。

今の立者は全然自己本位、それもホンの鼻下思案の我利々々主義で、大局から観た、も些と大仰だが、眞實の我が名譽など云ふ事を考へる腹の据つた人間は、先ア一人あるか二人あるか、五本の指を持って餘すぐらゐるものである。弟子を取ると云つても、本人の人相骨格を檢めるでは無し、経歴を何う調べやうでは無し、紹介者次第好い加減に猫の子を貰ふよりも簡單に濟ませて、小間使が一人天から降つて來たやうに心得る。弟子になる方も篋棒なら、取る方も歴乎としたる篋棒である。

弟子たる其の者、何時か鬘を冠る事になつて、時々總出の仕出しなどに出る。處が近來は芥名題多く、昔は上分すら引受けるを屑しとせざりし程度の役役をも、立者面の給金稼ぎが阿容々々と相勤めるに随つて、順押しに名題下が相中どこの端役に甘んじ、爰等が手頃と觀念して働けば、上分以下へは、「申上げ升」さへ減多には廻つて來ず。三年経つても五年経つても、修行になるやうな事なければ何も覺えず、それならそれで、其様な弟子は打遣つて置けば好いものを、臺所からの這出し願をお嬢が取上げ取次けば、親方脂下つて領き給ひ、彼奴も來てから三年になる歟、上分にして貰つてやらう、などと向ふ見ずに頭取奥役へツケくとした交渉。云はれた方では吃驚すれど、彼奴ばかりが素人でもない、病人の云ふ通りにしてやれと、師匠に免じてか馬鹿にしてか、大抵な處で承知すると、あれが上分になるのなら己もなる、己は名題下にして貰はうと、各自に師匠を笠の出世争ひ、斯うして芥の押つ競

となる。吁と歎息せざるを得ぬ。

一體常識から考へれば、弟子の給金割を取るでもない師匠が、斯様なデモ弟子を拵へて何うする心算と不思議にもなれど、給金は興行に拂はせて、權助同様引つ使ふは己れ様の役得とあつては、皺噎つ聲でもチンチクリンでも、手下にして置くが便利、旅行などには殊に安値に一座が出来て、自分の懐中へ幾分なりと餘計なものが入る理窟と、斯う煎じ詰めて來ると、デモ弟子必しも足手纏ひにあらず、荷厄介にあらず。子供の傳をさせても大掃除の手傳に使つても、漬つ垂らしの小娘よりは安上りで用に立つ。

少し右左の分かる男は、悉く名題となり、四段目のデモ侍さへ、若し演らせれば見當の付かぬ名題下さんが音頭を取るのでは、上分以下が仕丁一役満足に勤まらぬも道理千萬。馬は措き、今に輿の昇ける者も無くならう。各大劇場の下廻り中に、立廻りの出来る者が引括めて幾人ある。デンく物

の軍兵に出てそれらしいのが幾人ある。馬に入れるのが幾人ある。満足な形をして近侍腰元に出られるのが幾人ある。道具幕の外で一寸動けるのが幾人ある。俳優及び劇場の従業員諸君、考へて見たら心細くはあるまいか。

尤も右大勢の下廻りの中には、押しも押されぬ立派な下廻りが全くないのでもない。けれどもそれは故名優の息の掛かつた老人達であつて、氣の毒ながら大抵先の知れてゐる輩、加之もこれ等は、今の立者と下廻りとの無藝無能を密に冷笑つて、大部屋の隅に野心を抛り出してゐる仙人である。自をも撻たす他をも誨へず、大聲で呼ばれる度に一二枚の書拔を擱んで稽古場へ断込むのが、一芝居中での大役と思つてゐるノホ、ン連である。何うしてこれ等に眞の活動が望まれやう。

憎まれ序に敢て云ふ、態と大きな聲をして云ふ。大劇場中に在つて殊に下廻りの悪いのは、帝劇と歌舞伎座とである。

此の二座の下廻りの如きは、純歌舞伎芝居が出ると、それこそ馬脚を現して了ふ、と云つて下廻りそれ自身のみが強ち悪い譯でもなく、座方が悪い譯でもない。前云ふ通り上分相當ぐらゐるの者までが皆名題になり、體よく云へば、野に遺賢なし、直截に云へば、頼み少ないのばかりが後に翻れてゐるからである。

随つて斯う云ふ事になる。下廻りに手強いのが居ない、其の代り新名題に満足なのが居ない。何と馬鹿な談ではないか。

大身代で目に立つ爲、歌舞伎帝劇と名は出したが、勿論其處に確りした者もある。新名題になつたのが名題下に揃つてゐれば、兎に角見られる座組でもある。現に老巧の下廻りもゐるけれども、奈何せん現在は右云ふ如き仙骨の少数と無修養の若者の多数とが、所謂下廻り團を形成つてゐるのである。新名題の拙劣、下廻りの無藝、今に臺詞と動きのある役は、並び大名でも皆

相應な名題が演らせられる事にならう。既に何れの興行師も、大立者を味噌にも糞にも扱き使ひ、中名題以下を眼中に置かぬ有様になつてゐる。

と云つて下廻りが愈何うでも好い者になつて了ふが最後、歌舞伎芝居は立派な不具者に出來上がる。立者ばかりが役者では無い。

歌舞伎芝居を保存するには、先づ差當り此の下廻りを養成せねばならぬ。けれども、そんな根氣の人があらうか。

名題検定試験も出來た今日、少しは下廻りに手堪へのあるものも溜まらうし、打壊しに云へば、名題に甲乙を附けて、デモの部を名題下格に引下けるも亦早手廻しの補充法ではあらうけれど、ヤアくの取巻にすら満足なのがないと來ては、先づ相中から仕立てゝ行かねば駄目の皮、素つほいのが賣物は下さらぬ。

下廻り諸君、斯う云つたのが若しお氣に障らば、御名々のお師匠さんにお聞

きなさるまでもなく、團八君梅助君あたりに一寸お尋ねなさい、必と得心が行き過ぎる。

役者の男衆

役者の男衆と云ふものは、一種の番頭である、又男のお小間使である。主人たる役者其人が芝居に出勤するとなると、稽古中から始終附添つて、一切の用を足し、何から何までに不自由なからしめるのである。眞に大役と云はねばならぬ。

日頃主人の宅に出入して、其家の令夫人に手助けし、主に細々した外交事務を取扱ふと云ふ義務なり責任なりも、亦輕からぬ仕事ではあるが、劇場に於

ける用向の多さと大切さとは、決して男性お小間使などの譯柄でなく、柔順で、機敏で、而して劇場内一切の慣例に精通してゐねばならぬ程、實によく重い役目を脊負つてゐるのである。

爰で一寸斷つて置くが、新舊を通じて、男衆と云ふものは名題格の俳優しか有つてゐない。樂屋に於いて部屋を與へられる資格のない、名題格以下の優には、規則として許されてゐない。勿論多人數雜居の中では御家來の置き處もない。其處で「男衆」と云へば、直ちに名題役者の附人たる事を意味する。

此の男衆、主人が腕車や自動車で出入するに方つて、或はそれに先立ち或は後に居残つて、何彼の用をせねばならぬ。委く云へば、稽古場なり樂屋なりへ早く行つてチャンと待受け、帽子外套携帶品の始末、飲食物の注文取次、芝居の部屋に在つては室内の取片付け方、鏡臺前の整理、往復の着物や部屋着の出し入れ、入浴に就いては手拭石鹸の用意、何十何度出入しやうと其の

都度の草履の揃へ方、客が來れば、蒲團や茶の世話、電話や使の應接、連中でもあれば其の挨拶接待もせねばならず、主人の爲には客の方の用を足してやる事もせねばならぬのである。

着物や袴羽織は勿論、足袋から下の帯までを一々手掛け、間には客の機嫌を取り、時と場合によつては、主人が失敗の罪を身に引受けて、男として勘忍ならぬ毒口をもハイ／＼と聞かねばならぬとは、何たる氣の毒な役目であらう。素人から見ると、人の女房のする事、番頭手代のする事、女中のする事等の一切をせねばならぬ様なのが、此の男衆である。

と云つた處で、これでは男衆の役目の半面しか説明されてゐない。主人の雜用を足すばかりなら、老實に働く人には誰にも勤まる、骨身を惜みさへしなけれは何うにか追付くけれども、男衆の男衆たる主要な役目は外にある。人氣役者に附いてゐる者が情事の取持や中繼をするやうな、そんな愚にも附か

ぬ簡単な事柄ではない。彼等男衆の要務は舞臺の上に関係がある。開き直つて云ふと、演劇に就いて、多少の交渉を有つてゐる、のである。

主人の雑用だけ足すのなら、單に氣が利いてゐるとか居ないとか、唯内輪だけの談で済むのであるが、一人前の男衆と云はれるには、先づ第一、舞臺へ出る其の主人の衣裳を着せる事が満足に出来ねばならぬ。衣裳を着けるには別に衣裳屋なる専門の働き人があつて、名題役者は勿論それ以下の役者にも着せはするのであるが、それが固より名題一人に一人づゝ附いてゐる譯ではないゆゑ、男衆は一々其の衣裳屋に手を假して、主人の支度に遺漏なからしめねばならぬ。これが眞に難しい。

役々によつての着物の着こなし、帶の締め様、持物の世話、加之も故實を調べた史劇物の支度などよ來ると、後は衣裳屋に任せるとしても、前の方の仕末は男衆自身が受持たねばならぬ職務上、直垂だの、狩衣だの、袍だのと整

へ方も辨へてゐねばならず、鎧兜小手臈當の着け工合、沓の紐の結び方にもまで熟練してゐねばならぬ。イヤ、角帶一本の結び方にもそれ／＼上手下手がある。

尤も、一面から云ふと、前述の如く、既に衣裳屋のある以上、敢て男衆の技倆を要しない様でもあるが、各部屋を廻る衣裳屋の男ばかり便にしてゐては、急ぎの時の間に合はぬ。主人の役者も不面目である。罷り間違へば男衆一人でも主人の支度ぐらゐは引受ける心得がなければならぬ。深く考へると迂濶り男衆などになれた義理のものではないが、新派は其處へ行くと大いに樂である。だに因つて、新派は皆弟子に用をさせて、特別の事務的御家來を置いて居ない。

舊派即ち歌舞伎役者の方でも、名題には大抵弟子があるゆゑ、其の弟子が大分師匠の用を足し、男衆の助手とはなるのであるが、それでも尙且大體の責

任は男衆が負はねばならぬ。主人が舞臺へ行く時には、出場前一口飲む習慣の湯を、湯呑に入れて附いて行く。持つて出る小道具を、イザと云ふ際まで預かつてゐる。入つて来る道に上草履を揃へて待つてもるねばならぬ。一度引込んで直ぐ又出るやうな時には、チャンと機會を見てゐて主人に知らせる役目をも申し付かる。

然れば、大役の幾つかを引受けるやうな大立者の男衆となると、見習同様の下働や、弟子の誰彼の手助があるとしても、開場中と來たら其の忙さは一通りでない。何うすれば斯様も忠實に責任を重んじて働けるかと、傍からは不思議に思はれるまでに、彼等は眞面目に仕へるのである。

近頃は役者の自用車の車夫や、全然の素人やが、急拵への男衆となつて樂屋を働くのが多い。それゆゑ大抵半人前の仕事しか出來ぬ。主人のお小間使にはなるが、女形を主人に有ちながら帶一本締める手傳の出來ぬのが多い。立

役の男衆でありながら、太刀一本満足に佩かせる事の出來ぬのが多い。それ等は樂屋内に於ける習慣法則や言葉遣や禮儀やを知らない、斯う云ふ事は何う取計らうべきか、斯う云ふ用は如何に取扱ふべきかと言ふを辨へぬ、随分見つともないものである。けれども實は、それを願使してゐる主人の役者其人にも、お先眞暗なのが多い。

偕、長々と男衆の大役なるを説いた。今度は其の大役に甘んじて忠勤を抽んづる者の少からぬ譯を云はねばならぬが、それはもう簡單にして置かう。

主人からの給金、客からの祝儀、主人の家庭からの貰物等で、存外生活が樂であるのに、忠實にしてさへるれば、決して解雇の憂がない、即ち安全な職業である。それに第一は本人が芝居の空氣が好きで爲るの故、我儘な主人夫婦や面倒な用向を有つても、大して苦にもしないのである。忙い中にも、何處か暢氣な、賑やかな、面白可笑い氣分が味はへるからである。斯くて役

者の男衆には爲り人がある、よくも勤める。

半人前以上一人前以下の者で、小才の利く男衆には往々良くない事をするのがある。主人を突つ付いて興行師側や目下の者を困らせたり、自分の役得の爲に主人に不品行を勧めたり、これ等が男衆の主なる害である。又世才に長けたのは、何時か自ら地位を高めて純然たる番頭さんになり、主人の體を或る度合まで左右するやうなものもある。何しろ、歌舞伎役者の男衆なる者は、主人の役者の家庭にあつても舞臺裏に在つても、侮り難い一種の力を有つてゐる。新派には弟子なり番頭なりが其の穴を行つてゐる。

京阪の役者中には、興行人側より公然と我が男衆の給金を取つてゐるのがあつる。取る者出す者、共に常識を以て律し難い。芝居國は變な處である。

芝居道の定法を心得、人附合が良く、仕事に忠實で且つ熟練し、それで人物も善く、何處へ出して一人前以上の男衆として押しも押されもせぬと云ふ

男衆が、今東京大歌舞伎の樂屋に幾人在るかと云ふに、五本の指を折るにも足りない。

先頃まで生きてゐた菊五郎の許の留爺やは、五代目、六代目に歴史して、男衆中第一の稱があつたが、惜い哉老いて死んだ。今樂屋内で最も評判の好いのは、これも先代當代と二代續けて勤めてゐる左團次の許の市さんである、年は老つても好い男でもある。尙此外で一寸知られてゐるのは、訥子の市さん、羽左衛門の豊公、小團次の直公、源之助の大石、宗十郎の長やん、などで、何れも可なりな古顔である。

俳優の御令聞

劇界の立者何の何某の奥様御新造おかみさんと申上げた處で、羽衣を入揚けた爲に是非なく世帯染みたと云ふ天人出ばかりもなき事なれば、數の中には賢夫人あり愚美人あり、劇女も烈婦も、其處はわれく下界並に押し列んだる御一同の、容色なり料簡なりは言ふまでもなく別々として、何處も同じ女房氣質は皆焼餅の顔のテカノ、光る君に、業平を世話に碎いて細末にして振掛けたやうな好い

男揃ひなれば、これに連添ふ女氣は、嬉さ半分案じが半分。好い役が附いて給金が上がって、それで浮氣を致しませんやうにと、観音様不動様は朝飯前、流行物なら妙法様穴守様天理ン王の尊に金光様、手當り次第足序に片端より祈り廻して、成らう事なら定連の千人宛もある連中の幹事が、毎日亭主浮氣止めの御符を持つて御機嫌伺ひに来て呉れば好い、お参詣に出歩く入費だけでも助かると、身上大事も手傳つての良人思ひ、小人は閑居して不善をなすと雖も、爰等の女子は欠の間隙に貞節を段取る。多幸なる哉俳優諸君。之を老人に聞く、昔の役者の内儀は大べらに亭主の舞臺を見物する事なく、慎深きは小屋への出入をすら避けたりと。然しそれでは情愛が薄し。今の立者の御内寶は、遊藝百般に精く舞臺に明るく、早く開場前より内讀に口出して作者奥役を閉口させ、一日の役の選好み衣裳の贅澤に采配を振つて表方を怖入らすの技倆あれば、内の親方の出る芝居の初日には、前以て場所を附

込み、客筋と出會つた時の所思も顧ず、棧敷うづらの三四五と云ふ目拔に陣取つて威儀堂々。儘になるなら何某妻何子と書いて額に貼つて居たい位の心意氣とて、外の役者が演てる間には談論風發、あの人は何故彼様形が悪いだらうの、不器用だらうのと慨歎に堪へぬもあり、口不調法なのは煙草と搔餅で徒然を凌ぎ、一幕の中に男衆が樂屋から二三度も用達しに罷出る有様なれど、内の親方の顔一たび舞臺に現るよや、白粉が薄いと思つた外は何事も眼に入らず、デレリポーツと他愛のなき事ラヂウムの蒸風呂から出て斯うはあるまいと思ふばかりの膨弛け方。夫婦なればこそ、女房なればこそ。然れば此の貞女、唯家の人の顔さへ眺めてゐれば好いのかと思ふと然にあらす。親方歸宅して差向の話に、何うも彼處の場の衣裳が何う、何處の幕切の臺詞が斯うとあれば、本當に然うですとも、あんな物を着せて古實も何もあるもんですか、文士だなんて、あの幕切の拙さ加減は何でせう、明日ダメを出

しておやんなさい、黙つてゐると癖になりますと、便所へ行く途でお客様に御挨拶をしてゐた留守中の舞臺にまで説を吐き、親方好かれの内助の大功。話の續き工合にては、寢物語に弟子の評判など始まりて、常に忠節を存せざる由の輩は、次興行に面倒を見て戴けぬ女罰靨面、三階の話の種ともなる事なり。

一口に亭主關白の位と申せども、俳優は藝術家にして世事に疎く、兎角賢夫人任せが多ければ、小遣帳係より貯金帳係の身分相應、何彼に附けて金方に其の勇猛を感歎させ、巴板額並のに至つては、惡獸毒蛇の名を異名に謳はれ、一曲も二曲もある芝居者をして戦かしむる勢は、宛ら水滸の豪傑、一丈青も兩母もこれにはお車の側に立つてお手を取りますばかりとは、狂言綺語の形容にあらず、純寫實の有りのまゝ。

尤も、十中の一二凡骨のなきにもあらず。大事の亭主は他所の女に貸し下さ

れの、獨り恠々物案じ、偶に亭主風を吹かされる邪慳を寧ろ嬉がり、弟子や男衆に慰められ宥められるを切ても力のにして、女子大學とは一字違ひで百年隔たる女大學其儘の内氣者、家業の事は一切番頭任せの大人しいもあれど、斯うして置けば亭主方途もなく伸さ張るとて、大抵のは右云ふ如き弓馬槍劍、お手並年中人目を驚かす。

女房の妬く程亭主持てもせず。評判の四半分も賣れかねて、安會社員と名を列ねて施主に附く親方の藝妓買。女房も満更然うと知らぬでなけれど、時の機では何う役を振替へられうやら分からぬのみか、取るよりも取られる今の役者の穩當、身上も亭主の次に大切と思へば尙且妬かすには居られず。或時は膨れ或時は胸づくしの、此の解決着かざる間は、連中へ行つてやツた客も、帳場で奥方から飛沫の御冷遇。看客の爲劇壇の爲、役者の女房は徒忽に看過ごし難し。

客先への顔出し、連中の運動、仲間の交際、弟子召使への行渡り、世帯の監督、これが役者の女房の仕事なれど、三面六臂は幕内にも氣が廻り、序に亭主も引廻す智慧の餘りは旅行にまで現れて、驥尾に附すと云ふ詞とは反對に、車首に附しての鐵道旅行。金方に自分の片迎ひ雑用をも辨へさせて、立者何某の家内で御座る、こんな亭主に連添つてゐる果報女を見てお置きなさいと、汽車から一緒に下り立つて一緒に宿。それも祝儀茶代でも不斷に置く事か、他人の物で義理をする番頭や男衆の計らひとは違つて、一にも二にも我が身上を考へるお嬢は萬事に耳つちく、お極りの雑用に足し前もせねば、唯遣る物も理の當然を專一に無駄をせず。と云つて女房附のお陰に女中の用が助かるでもないどころか、亭主の着物一枚疊まぬ女房の取散らし方男よりも烈く、宿の奉公人共を色氣もなく眼下に瞰下しては愚にも附かぬ用を幾度にも吩咐け、黙つてゐても爲るに極つた事を一々指圖し、朝は間拔な時分に

床を上げさせ、夜は更けるまで名所古蹟盛り場の見物話、土地の藝妓の缺點探し、而して偶に早起をしたと思へば、髪を洗ふお湯ウを沸かして頂戴と。吁何うせ勘定を拂ふものなら斯くもあるべし。

貞女烈婦の側を離れて、偶には伸うく、氣保養でも爲やうと思つて旅稼を樂みにしてゐる亭主。然うは問屋で卸さぬと、御同役を誘ひ合はして、監督がてら土地見物にゾロくと附纏ひ行く女隊。初日が出ればズラリズツと棧敷に控へ、打出せば宿の一室に引附けて獨歩を決してさせず。暇があれば其の大切な亭主を道案内に東西南北無闇と經廻り、頼朝と秀頼と親子喧嘩をした處は何處なのなどと史蹟を質せど、別にそれ等に執着があるでは無く、飯時には必と歸つて、宿屋になかく樂はさせず。御最良とあつて偶に婆ア藝妓が尋ねて呉ても、好い話相手と自分が乗出して亭主を却つて繋ぎに使ひ、精一杯如才ながつて外交の手腕を揮へば揮ふほど、尋ねた方は打解けかねて長

居もならず、匆々に立歸つて友朋輩に斯くと語れば、役者の噂よりは女房の評論が先に立つて、色氣の外の焼餅やら僻やら、終には誰々さんも随分馬鹿にしてゐるわ、などと亭主の役者殿に、女房を見せ付けに連れ歩いてゐると云ふお憎しみ掛かり、若い妓の如きは要もなき面當に、日頃はドツとせぬ旦那様まで驅出して打揃つての御見物。二度に一度心にもない悪口でも云へば、然うだ然うだと旦那は直ぐ様宜からぬ方に札を入れ、友達に逢つての評にも、あれには呂の聲がなくて不可よ、などと右から左へ取次ぎの毒は狭い土地に忽ち行渡つて人氣揚がらず。樂屋へ遺物も來ねば御飯食へのお誘ひもなく、随つて弟子男衆にも餘得なく、宿も樂屋も世帯染みて、旅の耻はと云ふ勇氣引込み、己も嬢アへ罐詰でも買つて行かうと下つ端に佛氣が附くやうになつては、興行の成績知るべきのみで明けた穴、埋まらぬ話と金方の愚痴は、後三年までの不作ともなるぞかし。

役者の旅行、固より色氣を賣るにあらねど、夫婦打揃つての参上は、牡丹餅の贈答をするにもあらぬ交際には堅過ぎたり。男が男の友達を話しに來いと招いた折にも、御夫人御同伴はテレ物なり。亭主の番は賢夫人が十慮の一失。加之に何ぞ不出來しでもあるが最後、おかみさんは嬪アとなり、親方も馬方も忽ちゴツチャになるの虞。藝人としては老も若も、見得と色氣は捨てぬが肝腎。と云つた處で、此の位の理窟は先刻承知の賢烈揃ひ。そんな舊式な人氣取策は、役者の女房が芝居を見に行かなかつた時代の小細工でせう、樂屋や宿屋で何と云はうと、自家の親方はハイ立者なんですからねエ。と煙管をボンとやられとばビクツとする藝術家。ウム／＼本當だ、女一人で別に他國へ見物に出掛けるとなると、供だの何のと金が無駄だ。弟子共聞いて、無駄ほど錢を使ふ風かいと。嗟不忠の臣、感ず可き哉婦。

今昔問答

一ツ長屋の佐次兵衛フラーリと來て、われ等のやうな昔者には分からの事が澤山ある、五六不審參るゆる返答に及べと云ふ。斯く云ふ六兵衛乃ち采配を斜に構へて、サア何でも持つて來いと云ふ。(合印、○は佐次兵衛、△は六兵衛)。

○此の二三年顔見世興行と云ふ芝居が流行る、それは一體何で御座る。
 △役者の顔を見せるから顔見世、見せ物並に顔さへ並べてるれば好いから顔見世、顔が見世を出してアセチリンの灯を鼻の穴から吹いてゐるのだと思ふ

と、大きな料簡違。

○それが又何で十一月の興行に限つて、然うは云ふので御座る。

△昔は一座の顔觸を變へて見せたれど、今は役者拂底にてなかく融通が附かず、と云つて、そんな事を氣に掛けてゐては、折角昔からある芝居道の通語が使へぬに因つて、霜月の芝居さへ見れば、サア爰だと顔見世顔見世と云つて、通人を寢粉にしない算段をするので御座る。秋刀魚は日黒、他行とは奥に寝てゐる事で御座る。

○それでは序幕の事は三番叟、食堂は幕の内屋、二幕目三幕目と云ふ事は、四立目五立目と心得るが大通で御座るか。

△當節は、一番目二番目三番目四番目までも狂言のある世の中、能と芝居とは物が違ふなどと思つてゐるは、大きな痴漢。

○當節と云へば、此頃の評判記には、舞臺の事よりも外方の理窟の方が餘計

なのは、一體何うした事で御座る。

△芝居は藝術、藝術は立派でなくてはならぬと云ふ理窟は、一度覺えて置けば何んにでも通用すれど、型物の藝の評判などは、迂濶りすると尻尾を捕まツて、無學文盲の役者達にも笑はれるによつて、態と願て他を言ふので御座る。と申す説もあるやうなれど、決して左様では御座らぬ。一々論ふに足りぬ藝に筆舌を勞するは、癩疾に棒打、無駄な手間だと悟つたので御座る。

○何故今時の役者はそのやうに下手なので御座る。

△芝居小屋が多くて役者が少く、其の少い役者を大所で買占めて、ホイ／＼大事にするによつて彼等は伸さ張り、高い給金を取つて安樂に暮らし、物に不自由を感じぬゆゑに、舞臺が自然ダラケて參る。人間でも猿でも腹が空いてゐぬと仕事は駄目で御座る。

○役者も悪いに違ひなけれど、狂言も悪い事は御座らぬか。

△昔のは愚作ばかり、今のは名作ばかりと心得て宜い。

○それは何う云ふ事で御座る。

△昔の作者は學問がなく、今の作者は學者ばかり、と云つて、芝居の樂屋の作者の事では御座らぬ、素人の作者即ち作家なる者で、これが唯滅茶々々に偉いので御座る。役者に本を賣込む事も、註文によつて何うでも捏ちる事も、新頭腦は又格別。然うは融通の附かない徒でも、何か七六ケしく書いてさへ置けば、新劇團の用に立つと、サラ／＼と書いて傍訓なしの雑誌に載せる駢引。なか／＼隅には置けないところから、芝居では何時も廊下ばかり歩いてゐます。

○黒人の作者は如何で御座る。

△名題役者の試験同様、作者の試験をしたら、九分通りは落第で御座る。書拔が満足に書けるのが日本中に幾人あるか、と云ふくらゐな心細い其の作者

を相手に、名優が筋や臺詞の修正改作を不用意にやるのゆゑ、大抵な新作は滅茶苦茶で御座る。

○作者は兎もあれ、作家は嘸怒るで御座らう。

△作家も大抵は怒らぬで御座る。野暮を云へば脚本の賣れが遠くなる、賣れなければ錢にならず。作家だとして飯を食ひ、パンを食ひ、時としては我が報酬のピンを行つて、女房に内密で不見點も買はねばならぬで御座る。

○此節の芝居の不入は、作者も作家も役者も興行師も、一切合財悪い爲で御座るか。

△興行師同志に一致がないゆゑ役者に足下を見られ、仕込が高くなるばかり、其處で場代が自ら高くなる。近頃の大歌舞伎へ夫婦親子が打揃つて出掛け、平土間程度の所で見物すると、一月の米の代がなくなる。そんな譯で、今の娘子供は芝居を強請るよりも、着物や持物を親に強請る。外見を張る事が一

般の氣風になつたゆゑ、歌舞伎座を家中で見ると、指環を買つて下さいと来る。芝居の話が出来ないのも困るけれど、それは帝劇の女優劇を二等で見ても置くから好いわとなる。

○それは事實で御座るか。

△此方嘘と均一は決していつた事が御座らぬ、と申すは表面、此節のやうに人間が客つ垂になつて、均一の初日へ行くを幅の利かない事とも思はず、中等以上の人までが飾り立つて押掛ける様になつては、此の安い日に見て了はぬは阿呆で御座る。少し如何はしい藝妓になると、初日に招待されてロハ見物したまよ、錢を拂つては一度も見ないので御座る。以前は、初日に棧敷や平で見る客は、出揃つてから必と見直すに極つたもので御座つたが、芝居を見るのでなく、見た事を吹聴する種さへあればそれで好い今の客は、早く一遍見てさへ置けば結構なので御座る。金色燦爛たる紳士淑女が、帝劇の隅つ

方で偉さうに見物してゐるのを見ても、萬事外見で固めた心締め、潰しの利かない物に金を掛けるのは愚だと思つてゐる大正氣質が、顯著と目に見えるで御座る。幾ら特等で見た時の番組でも、質には置けない譯で御座る。

○然う紳士淑女を蔑したり、作家に關つたりするから憎まれる。

△忠臣藏の分らない高尚な人や、外國の文豪の名の讀み方さへ一致しない今の文壇の浮浪人やに、そんな野暮な人は御座らぬ。サア、大抵感服した處で歸らツしやれ。

寄席の樂屋

講釋場即ち博識家の所謂講談席を別にすれば、義太夫の席も浪花節の席も齊くこれ寄席である。けれども、爰には最も通俗に言ひ慣されて居る通り、單に寄席と云つて色物の寄席に通用させる。

「色物の寄席」、これも理窟つほく云へば噺の寄席である。昔は噺とか咄とか書いたのを今の世には落語と書く其の藝の間の楔に、お色取として交へる諸藝、これを色物と云ふのであつて、噺と色物とは自體別種のものであるが、

其の入交つたる一團の興行をする處を、誰が極めるともなく、何時か色物の寄席とか色物席とか呼ぶ事になつた。

人によつては、寄席をヨセセキと丁寧に讀むが、これはヨセで澤山である。

それから、寄席の事を席亭と云ふ人があるが、餘り字學の心得があるからの感違ひで、地方は知らず、東京で言ひ慣されて居る席亭と云ふ語は、席の亭主の略即ち寄亭の主人と云ふ事である。間違つて居る人の多いのは、學者の多い證據である。

前口上序に右色物の説明に及ぶが、これは、三絃物、手品、曲藝、踊、押弘めては、假聲、音曲、掛合噺様の、素噺ならぬ賑やかなる他の諸藝をも含めての總稱。東京では今の三遊と柳との兩派がこれの大集團である。

處で、此の色物席の營業振や女義太夫の樂屋やに就いては折々物語る人もあるが、落語席と七六かしく云ふ噺の寄席の樂屋談は、色物却つてお色氣に乏

い故か、これまで餘り筆にする人が無かつたやうである、と思つて、春の日永のお慰みに一寸書く。

前座の役目

何處の寄席の興行にも、一座としては、前座、下座、二つ目、中入前、眞打等の面々がある。外には、軽い處で、見習、重立つた處で、助け、と云ふ身分の者もある。

順序として、先づ前座から記して行かう。

落語家志願の男あつて、小さんなり圓右なりの弟子になつたとする、而してこれが見習になる。

業體見習ひの爲、毎晩寄席へ通つて、先輩の前座のする事を見いく少しづつ覚え、其の手傳をするのが抑の手ほどきである。

藝は師匠門下の誰ぞに教へられ、又樂屋に居て先輩のを聞いて覚えもするの

が修行

高座の藝と樂屋の雜務とが一通り出来るやうになると、此の見習が前座に出世して、從來一夜二三十錢の小遣錢を貰つて居た者が、五十錢ぐらゐの日給に昇る。

諸其の素人の弟子に見習はれると云ふ前座の職務は如何。なか／＼局外で思ふやうなものではない。

先づ初日の晩には取分け早くから樂屋入をして、火鉢の火から座蒲團の支度まで爲、それから大抵の時間に一番と云ふを入れる。これは一番太鼓を入れると云ふ事で、大太鼓を鳴らすのである。

それから少し経つて、大太鼓と太鼓とで二番を入れるのであるが、これは前座の外の人が手傳ふ。手傳人は二つ目と云ふ身分の者であるが、場合によつては相應な藝人が洒落に手を出す事もある。

愈始まる頃になれば、藝人がボツ／＼来る、これに茶を出すなどの用もある。開演時間が来れば、客が一人でも二人でも、時と場合では誰も居なくとも、高い處に押し上つて饒舌るので、これが何よりの修行なのである。それから益々樂屋の用が多くなる。出入る諸藝人の道具持物の始末、脱いだ羽織を高座から引いたり、それを疊んだり、御簾物と云つて高座の御簾を使ふ人の爲には、その上げ下しもせねばならず、口上も云はねばならぬが、三絃物の口上が満足に云へるやうならそれこそ前座一人前である。柳派ではチャンと口上を云はせるやうであるが、三遊派では殆ど總て黙々である。淨瑠璃の外題など一々吹聴する必要は無いと云ふ幹部の意見なのである。浄瑠璃はチャンと口上を以て申上ぐべきである。それから又、出物帳を附ける用がある。誰は何を演つたと云ふ事を、小遣帳のやうに一晩一晩帳面に記し、それを後から後からと来る藝人に見せるので

ある、出演者はこれを見て、演藝の重複を避け、取合せを好くする筈ではあるのだが、數を有たぬ、而して粗雑な、氣働のない今の藝人達には、一夜に同一物を繰返さぬ突支棒にしか此の帳面が役立たぬ。序に記すが、此の帳面を幾興行押通しに使はせる席もあるが、大抵は十五日間一興行に一冊づと新しく拵へる。中入と稱する彼の休憩の折には、前座が「お中入」と云ふのである。中入が済むと太鼓を敲いてシヤギリと云ふ囃子をせねばならぬ。打出しにも大太鼓を敲く役がある。又樂屋から首を出して、「有難う存じます、お静かに行らっしゃい」と、一應の御挨拶にも及ばねばならぬ。而して後始末をしてから辛と自分の體になつて歸る。

と、これだけでも可なり用がある。加之も尙々外に幾らも仕事がある。掛持藝人の都合を打合せたりなどする爲木戸の方へ電話を掛けに行つたり、

眞打が樂屋入をすると、特別の茶を茶番（茶や火鉢を客に賣る處）の方へ貰ひに行つたり、中入後には、席から寄越す揚高を、眞打の番頭の名代に一時預かつたり、と云つたやうな事もある。

それから、此頃では、藝人の名札を出したり、入れたりなど、蒲團火鉢の置直し以外の高座の用がある。人使ひの荒い藝人に遭ふと戶外へ買物に遣られる。なか／＼樂でない。

イヤまだ大役がある。前座は眞打の家へなり又其の番頭の家へなり、毎日出勤前に行つて、各出演者に渡すべき前夜の給金を受取り、これを樂屋にて一々當人に手渡する用がある。此の給金は、割り、と稱へ、其日々々の揚高を歩割にして一々紙に包み、表に宛名、裏に席の名、内には、日附、客數、金高を記して、その現金を封入したるものである。始から終まで樂屋に居附の便宜上、前座が此の金錢問題に関り合ふのであらう。

處でもツと大役がある。初日の晩に各出演者が、掛持最初の席として、二人も三人も、場合によつては四五人も、宵の口にドカ／＼と落合ふ事のあつた時、前座は藝の取合せを考へて、高座へ上る順を協定して貰ふ用がある。相手が皆先輩だからと云つて、各自勝手にばかりして置いて、それで好いと云ふ譯のもので無い、少しは頭腦を働かせねばならぬ。

まだ大役がある。高座で落語家の脱いだ羽織を引いて取るは、後の準備の成つた報告である故、落語の寸法を見て爲ると云ふ事が大切である。折角の段落を越した處で羽織を引けば、もう好いのだと思つても、次の段落までを高座の人は勤めねばならぬ、と云つたやうな工合がある。落語を切れ／＼に演つたり掛持の時間を急いたりする人ばかりが押合つて居る爲に、前座も餘計な苦勞をせねばならぬ、忌な御時世である。

師匠の家へは始終顔出しをして、お小間使を勤めたり、夜は行つてから歸る

まで右の如くに働かせられたりでは、随分辛いものやうでもあるが、揚高に關らぬ日給を貰つて、御簾の世話になる人達からは心附を受け、重立つた人々からは盆暮の貰物もあり、而して何時しか藝を覚えて出世の道が附くとすれば、然う悪い商賣でもない。昔の事を思へば今は其の十分一の苦勞であるとは本當である。仕込む人の方に嚴いのが無いゆゑ、何んと云つても今の若い連中は先ア氣樂だ。

下座の仕事

何の一座にも、前座同様下座は必と一人づゝ居る。これは樂屋に在つて三絃を弾く役であるが、仕事が仕事丈に全部それが女である。諸下座には何がなると云ふと、寄席藝人に縁故のある、而して絃道の明いた人がなるのであるが、蔭で働く役だけに、昔は昔今は色香の薄らいだ姥櫻。然れば古老先輩と一段寂の附いた處になると、鶯啼かした事は諸措き、梅干

になつてからさへ既に幾星霜、見るから古色蒼然として、美術俱樂部あたりの入札には高値が出さうなものもあるが、斯う云ふのでないと、何でも來いとは行かぬのである。一口に下座と云つても、本當の一人前と云はれるには容易ならぬ修行が要る。

給金は、前座同様、揚高に因らぬ定給で、一夜普通五十錢、上等のになれば六七十錢も貰へる。

下座は弾いて唄ひさへすれば好いやうな役で居て然うでない。關西地方では下座の性質、上活用上一見識有たしてあるが、東京では前座並の雑用をも樂屋に於いてはせねばならぬ。前座ほどでないまでも、兎に角働かねばならぬ。三絃物の藝人の道具の上け下しは此の下座の役である。樂屋に食物のある時、それを眞打に取分けて置くなどの女らしい用もある。前座が不馴の時は指圖もしてやらねばならぬ。なか／＼打つ坐つては居られない。

勤務の時間は、前座同様一番早くから一番終ひ迄で、真打の歸つた後から出掛けるのである。だに因つて、人形町の鈴木本（ごんぼ）の如く、十二時近く果ねるを厭（いと）はぬ席で、談話好きの真打にでも出會したが最後、下座や前座は極敗である。腕車を待たして置いて、御機嫌取りの弟子共を捉へて煙草フカク無駄口を利いて居る身は面白からうが、爾後電車で遙々歸る下つ端は實に可哀想。給金外の収入と云つては、前座と同一仲間からの心附が主なるものであるが、夜分五六時間の女の仕事として、月十五六圓から二十圓は決して悪い商賣でない、唯取る金で無いにしてもだ。

それに、席によつては前座や下座に千秋樂の晩五十錢に手拭の一本ぐらゐ出すものもある。然し斯う氣の着くのはザラには無い。

下座は大抵誰々の一座と其の所屬が極つて居る。けれども無所屬のもあつて、これ等が、時折看板主になる人の樂屋に割振られるやうな事になる。

若手の真打の中には、場合に因つて師匠や仲間やの下座を臨時借用するものもある。と、斯様な工合で、大中年増のペンく屋さん達、仲間拂底の昨今は取分け旨い株を占めて居るのであつて、偶に自派真打の出演席少なくて遊びが出来ても、其の派の事務所から休金と稱する補助金が多少出るゆゑ、これ以て愚痴を翻すべきであるまい。

浮世の義理の切れツ端としては、初日と樂とに真打の自宅へ顔出しをすべきであるが、今では其様な務め氣のある下座は少ないらしい。それとも全部老實だつたら謝る。

下座の修行は前座と同一見習からやるのであるが、一人前のはお係に於いて興行毎に割當てられる。

柳にも三遊にも下座の大姐が一人づつ頭に居て、仲間の束ねをして居る。而して十五日一興行の替り目毎に、前以て下座の寄合をするが、才藏の市とは違

ふから、極つて居る人は其の通り、融通の附くのは適宜に割振り、而してそれぞれ稼がせるのである。

序に記すが、前座下座の定給の者は、それを其日に渡されるので、他の人の割りの如く一日後れになるもので無い。

二つ目其他

前座が出世すると二つ目と云ふのになる、前座の後即ち二人目に高座へ上れる資格が出来るのである。

斯うなると給金は揚高に因るので、席は二軒ぐらゐる歩けるが、其の終の席では果ねるまで居ねばならず、最初の席では二番を入れる手傳をせねばならぬ。給金は若手真打の並の場合（真を打つ時の外の場合）の凡そ半額ぐらゐる取れるが、不入の席でも廻らうものなら、前座より却つて割が悪くなる。中尉貧乏の格であらう。

其の代り、一座が多人数の爲、食み出させられて高座を勤めぬ時でも、チャンと分配には與り得られる恩典がある。

前座や此の二つ目の者は、樂屋に藝人の切れた時、彼の「繋ぎ」と云ふ役を勤める事がある。此の時に日頃の蘊蓄を傾けて、大いに振はねばならぬのである。所謂後連が来るまでの穴を、何うにでもして埋め果せば當座の手柄、又後日出世の端緒にもなる。

二つ目の出世したのを、總じて中入前と云ふ。名前の出所は讀んで字の如くであるが、掛持亂雑、デモ真打濫造等の結果、中入までにも多くの真打が助けやら正當やら種々の立場で現れ、お中入と云ふ聲は、近來大抵真打株の人の下りた處で聞かれる事になつた。けれども以前は、真打にならぬ人が自分の高座で中入になる事を、大いなる名譽と心得、それを望みもし其處に勵みもしたものであつたに、今は芝居道に名題役者の申上升がある格で、寄席の

中入も異う立派になつて了つた。中入前が勤まるくらゐの人は、皆眞打になつたのであつて、野に遺賢なしさね。

中入前の出世したのが右に云ふ新進、露骨に云ふと第三流ぐらゐの眞打。サア爰等の出世は技倆次第人氣次第。前座が出入の世話もしてくれる代りに、交際が張つて懐中はなかく、樂に行かない。中入前で居て人氣がないなどよ來たら、収入は少なし、樂屋の用も自ら辨ぜざるを得ざる始末となる。

第二流處の眞打でも、古顔のは他で幾分尊敬する状がある。龜の甲より年の功で、若い者よりは幾らか能書の材料を多く有つて居るからである。若手が神妙なのでは無い。

第一流の眞打と來ると、其の御威勢誠に素晴らしいものである。居附の者は勿論、他から廻つて來る者でも、中入後に出る二流以下の人達は、チャンと其の大眞打の歸るまで待つて居る。

一流以下それ〴〵身分によつて、樂屋に於ける坐所は異なるのであるが、講談とか義大夫とか新内とかの他流の重立つたる人達は、客分として無論優遇する。而して此の客分中で最もツンと小憎らしく取澄まして居るのは、兎角女義大夫に多いと。

大眞打即ち一流の人になると、番頭を使つて、割りの勘定其他の用向をさせるが、其様な人は幾人もない。大抵は夫子自ら二一天作の五。

樂屋の種々

繋ぎに引掛かつたのでもないのに、話が大分長くなつて來た。これからは次第不同、短夜大一座掛持澤山と云ふ意氣で、思出すまよを粒で列べる。

初日の晩には、樂屋の落合つた人達が、色取やら互の便利やらから考へて、掛持の廻り順を相談する。

毎夜の揚高は、眞打が持歸つて、例の紙包にして翌日前座に渡す。

中入後第一に出るのを、喰付又は噓付と云ふ。初つ端へ取つ着くからであらうが、これには一寸賣れて居る人を選んで据ゑる。眞打の前に出るのを膝替りと云ひ、爰へは人氣のある色物を上げる。關西地方では義太夫界並にこれを凭れと云ふ。

最後に出るのは眞打と云ふが普通、看板主とも稱へ、又取りとも云ふ。取りとは眞を取るの意なるべく、それより轉じては、トリを取る、と云ふ語もある。眞を打つ、と云ふのも同じで、何れも一座の最後に踏張る事であるが、近年眞打が掛持の關係からして果ねの時間を急ぎ、後に色物を一高座残して置く事が始まつた。此の殿の事を、大阪の淨瑠璃などに云ふ如く、追出し、と稱へて居るは無作法な名だ。

樂屋は殆ど雑談で埋められる、有益な藝談もあれば、滑稽な艶話もある。時にはお安からぬ筋よりの遺物などが舞込む。惚話で奢る人もある。然うかと

思へば愚痴や不平の鉢合せもある。

意地の悪い者は、後に掛持を急ぐ人のあるを承知で長々と演る。後から出る人の得意のものを故意と先へ演つて了ふ。斯様な奴が尠なく無い。

落語には、前座噺だの、二つ目の噺だのと、噺の輕重難易に因つて自然の區別があるが、近頃は可なり無茶苦茶である。

毎晩打出すと席亭が樂屋へ挨拶に行くものであるが、少し入りのある席は、お高がつて其儀に及ばぬ由。藝人の方に意氣地が無いのである。

此節は總見の切符を賣付けて客を呼ぶ眞打がある。席では斯様なものを有難がる。自然運動や人氣でばかり客を引く藝人が幅をする。眞の藝を見込んで顔觸を拵へて興行する席は寂れる。心細い成行である。

客止をすると、芝居のやうに大入袋を出す席がある。

藝人の收入に就いての話がまだ残つて居るが、それは内幕の事に屬し、無闇

と知つたか振に饒舌るべきで無いゆる止めにし、術語、符牒なども御免蒙つて置く。

藝人對寄席の營業振に關しては、尙多くの談話もあれど、餘り執念くなるによつて、此度はこれでお別れ。

近頃寄席の會社が出来て、樂屋に特殊の事多けれど、これ亦他日のお話とする。

諸藝昔話

△先年有樂座に蒙古の一寸法師が現れた事があつたが、四十年も前には寄席の高座に、蜘蛛男と呼ばれた脊丈つ低が出た。箱入のまよ擔ぎ出されて、吹流を抛る日本手品を演り、後では一寸した手踊などを見せた。然し斯うした不具者に有り勝の頭でツかちであつたゆゑ、餘り心地の好い見せ物では無かつた。

△後年蟹婆アと稱する、これも同様なる一寸法師が現れたが、蜘蛛男が可な

り長い間人氣を持続した後なのと、婆アさん別に愛嬌のある藝を有たないと、間もなく消えて無くなつた。後に大女と看板打つたる見せ物女と共に、小屋掛へ出たが、此の大女、髪は島田に艶々と結び立て、肌を露はし大きな乳房を見せて居たにも拘らず、其の實男であつたと聞いた。

△手品序に其の向の話の、重立つた處を一纏めにして爲やうが、以前は、奇術だの魔術だのと云はぬどころか、テジナとも普通には呼ばず、一般にテツマとのみ云ひ慣はして居たゆゑ、色物仲間では、今も符牒のやうに是をツマと云つて通用させて居る。

△西洋手品が餘り流行らぬ頃、日本手品師として養老瀧五郎が寄席では賣れて居た。蜘蛛男も自然其の弟子分として藝を見せたので、養老勇扇とか名乗つて居たと思ふ。

△名人一蝶齋が、蝶柳齋と云つて居た頃、此の人の弟子に、春風蝶之助と云

ふ娘手品師があつて、義大夫の綾之助がドウスル連を産出したよりもモツと前の時代に、書生さんを騒がした事非常であつた。お約束の紋付の振袖に緋の襷を掛けて、黄色い聲で、未熟に御座りますれば仕損じは御容赦など、色つほい處をちらつかせて、諸お極まりの白紙の手品、扱いて燭臺の灯にかけ、嵐山は落花だの、那智山は白糸の瀧だのと、皆様御存知の小手先の業。早い時も遅い時もあつたれど、萬年新造の十七八、何時も美しい處で哩々の大人氣、手品の後では踊りもしたと覺えてゐる。

△蝶之助に関する雑報は、書生さんに多くの讀者を有つてゐた讀賣新聞によく現れた。而して其の文句の中に、己の本箱は蝶之助の手品の箱と、同じ幅だとか何うだとか云つて、書生達が騒ぐと云ふやうな形容までもあつた。お騒々しさ加減が思ひ遣られるではないか。

△蝶之助全盛の頃、絃物の方に宮子と云ふ美人があつて、これも亦素晴しい

評判であつたが、それは別に云ふとする。蝶之助は今支那とか朝鮮とかで料理屋をして、大層顔の良い女主人になつてゐるとの噂。委く知つてゐる御仁は幾らもあらう。

△一蝶齋の作品と獅子とは有名なものであつた。而して鍋島侯爵家に於て、天覽を賜はつた程の光榮ある歴史を有つて終つたのであるが、江戸仕立の眞の藝人は、畏多い事を賣物にするやうな料簡微塵もなく、一蝶齋は依然唯の一蝶齋の名の外、何物をも振廻さなかつた。勅任官ぐらゐに聽いて貰つたを生涯の面目と心得、矢鱈と吹聴するが如き成上りの場違ひ藝人等に、彼が使ふ鼠花火の火の粉でも喰はしてやりたかつた。

△一蝶齋は、晩年お極まりの箱を左右に飾立てずにも演つた。以前京橋の金澤の晝席の盛んな頃などには、高座の四方から客に見られながら、目にも留まらぬ早業を賣物に、吹流から寄席の大番傘を出すやうな、手綺麗な事を見

せた。

△日本手に附物の疔打、彼の太夫の側にてカンカラ太鼓と太鼓とを拍子面白く敲く後見は、生易い事では出来ぬので、自然其の人に乏く、さしも一蝶齋の附人たる者も、太夫の晩年には大分代物が悪くなつた。其の晩年のお齒黒坊主の前の後見は、例の無駄が軽く、第一にカンカラ太鼓の叩き方が巧く、手品の後見の仕方も涸れたものであつて、蝶之助の相手も永くして居たが、日本手品が廢つては、もう疔打の種も盡きやう。

△若い女の手づま遣ひには、二三人も一寸したのがあつたが、大抵立踊や布晒しを演つた。布晒しは、布の先を留めたまゝ、阿波の鳴門は親子三人順禮の波などよやり、最後に布の先を放して、大海は立波と太鼓入り大テレツクの堂々廻り、高座中に細長い白布を浪立たせる、と云つた次第のものであつた。今では知つてゐる人も多からうが、段々失るものと思つて、贅らしくも

饒舌つて置く。

△それから今一つ。立踊と云つたのは、其頃は太抵落語家の踊が坐踊であつて、女でもなければ、滅多と立上りはしなかつたものであるからである。今は高座の天井を衝抜きさうな大男が、憎々しい圖ウ體で小唄などを踊るが、お見上げ申した處、餘り好い格構では無い。高座のは坐踊に限るのだが、御婦人は赤いものなどを閃かす處に又格別の御愛嬌があるらしく、皆突立ち止つてお見せ下すつたものである。

△然るに、其のチラ／＼が宜からぬやにて、一時立踊は禁制となつた。それが近來復許されたは、宮子や蝶之助のやうな大問題の色物美人が、寄席の高座に跡を絶つた證據かと思ふと、吾人御老體は坐に水つ演の次第である。坐踊では故人柳橋が目に残つて居る。踊も巧かつたし、第一柄が締まつてゐて、大掃除の手傳に來たやうな咽つほい處がなかつた。

△談本街道に戻り、又日本手品の續きとなるが、古く高座で手練を見せてゐた者に、中村一登久と云ふ風采の好い男があつた。淺草の公園で定小屋の輕業師、天井を眞逆様にぶら下つて歩いたり、大仕掛の水藝を演つたりして、永い間評判を取つてゐるが、後に寄席へ出る事となり、鮮かな水藝を見せる前に、即席の謎掛をやり、巧い題を出した客には景物を進呈するなど、一寸變つた事で又賣つたが、其の謎に對する頓才は、なかく偉いものであつた。△けれども運命とでも云ふのか、自分が頭立つての興行が思ふやうに行かず、何時からか老軀を松旭齋天一一座の下積に置いて、トボ／＼と水藝の樂屋係。これが眞の縁の下の力持であるが、聞く所によれば、彼の評判なりし天一の水藝は、此の一登久の傳授であり又後見であつたのだと云ふ。

△糝粉細工の名人一徳齋美蝶は、飴細工をもやり、其の膨らました飴の中から種々な物を取り出す手品も見せた。糝粉細工の當て物も手品と云へば云ひ得

られる。乃ち序に饒舌つて置く。

△アサヒマンマロ、それに、萬國齋ヘイドン、此の二人は寄席に於ける西洋手品の極古い處であつたと覺えてゐる。歸天齋正一が大評判となつたのは、これより後の事である。

△西洋手品を流行らせたは、正一の功と云へぬ事もない。客から借りた手巾にアルコールを打つ掛けて燃して了ひ、それを外から取出すぐらるが賣物であつた當時の西洋手品の上を行き、箱に女を入れて外から劍や槍で突いたり、客の時計を借りてガチャ／＼に搗き碎き、これを短銃に込めてドンと打つと、的にした物の中から先の時計が現れたり、種々な目新しい事をした彼正一は、自分の名のみでなく、西洋奇術と云ふものゝ名までを高く揚けたのである。トランプの使分けや財寶杖や、皆此の頃から演り慣らされて居るのであるが、それを思ふと、奇術は一體に今まで根つから進歩してゐない。

△今でこそ活動寫眞などと云ふ面白いものがあるが、ズツと以前には幻燈と云ふ西洋映繪があつたばかり、からモウ心細いものであつたが、それでも在來の日本の映繪ばかり見て居た眼には珍しく面白いので、此の幻燈の勢力は大したものであつた。

△正一や、其後現れた他の人々や、西洋奇術師は殆ど皆此の幻燈を見せた。今は此の式の幻燈は、小形でこそあれ玩具屋にザラに賣つて居るが、其頃は何うして何うして、人物の肖像だの各地の風景だのが寫眞の如く映るのが、珍しくつて嬉しくつて誰も悉皆感心したものである。靴屋の職工の繪が映つて、其の鐵鎚を持つたる片手がギクシヤクと、一つ所を上つたり下つたりすると、これが大喝采を博したと云ふ始末。その癖こんなのは昔からの日本映繪にある型なのでありはするが、種油に燈心でやつて居た日本映繪と違ひ、ブリツキの箱にランプの明るいのをに入れて映すのからして、珍なり妙なりと云ふ

時節であるゆゑ、幻燈の人間の手が動くと来ては、實に一大事件であつたのである。言添へて置くが、日本の映繪は、寄席に於ける西洋奇術師の此の幻燈に因つて滅されたのである。

△正一の後、ジャグラー操一と云ふのが現れ、これは「取寄せ」とて、客の好んだ物を一個の眞鍮の筒から出すと云ふ手品を、第一の呼物にしてゐた。天勝の師たる彼の天一が賣出したのは割合に近年の事である。

△瞞着帽子の貞一などは固より新らしいが、柳一はあれで可なり古い方である。狂人になつた馬樂がまだ千枝と云つて、ノソリとして永年大太鼓を晝席に敲いてゐた頃、柳一事當時一柳の長刈頭は、千枝同型のブツキラ棒として始終晝席にも現れて居た。一柳は此の時分に皿廻しの修行を高座でしたのである。二枚廻し三枚廻し、或は風呂敷を廻し、座蒲團を廻し、飯櫃の蓋を廻し、大盥を廻し、客の眼前で演り損ひ演り損ひ、遂に今日の手練に達したの

である。急拵への皿廻し屋連と、選を異にしてゐるも所以ある哉である。

△寄席で眞を打つた西洋奇術師は、何れも幻燈を仲入前あたりに見せ、映寫中の暗紛れに、客の袂にトランプを入れて置いて、大切の奇術の時に一同をアツと云はせる種などに利用して居た。

△天一の賣出しは、木挽町の厚生館である。後に旅人宿になつた彼の厚生館が、錦輝館式の大貸席であつた頃、大掛りでなければ威せない、早くも世間を知つた天一は、此處で偶に開演した、而して仰山なる藝で評判を取つた。彼の最初の賣物は、張抜の大砲に少女を入れて、轟然一發宙に吊つたる太鼓に向つて放つと、少女は忽然として其處から姿を現すと云ふのであつた。威かし屋の天一は、これに洋行歸りの肩書を巧く配つて、到頭大小屋の手品師となり了せた。正一も操一も間接ながら追捲られて、それから西洋手品の寄席眞打はなくなつた形である。

△近來は義太夫でも浪花節でも、無闇と廣い處で演るが、斯う云ふ事に成行つたのは、右云ふ如き天一の策略が第一の因となつての事である。時勢の力もあるにしろだ。

△一蝶齋の涸れた工合と較べて、氣障つほいのは恐れるが、獨樂に於ける源水の技は、一蝶齋の手工品の手練に敢て劣らぬ。然しこれも亦此の人限り。斯うした江戸時代の藝は、遠からず寄席に跡を絶つであらう。

△太神樂や活惚やは、今でこそ江戸前として寄席好を嬉がらせてゐるが、以前は寄席になかつたと云つてもよい。曲毬ぐらゐるは有る一座も全く無いではなかつたが、近頃のやうでは無かつた。

△日本映繪は、都樂隠れ、都船没して、遂に夏の隅田川の船に佛を残すばかりとなつた。數へ立てると陰々たる事ばかりであるが中に、まだ命を繋いでゐる怪談は、割合に頑強であると云へる。

△怪談の文字を開談と看板に書くやうになつた頃が、即ち壽命の短くなり始であつた、藝人自身が脈の薄くなり掛けたのに心付いた時であつたのだ。それまでは正藏の外に左龍などが賣れてゐた、左伊龍だの右龍だのと云ふのもあつた。雨の音、龕燈のバク／＼、ハテ怖ろしい執念ぢやなアと來ると、存外おつな代物である、滅び切りぬも道理である。

△右の外、日本手工品に養老瀧之助、瀧川小梅、三升家瀧鯉齋、獨樂の源水の弟子に松井春水、西洋手工品に春天齋柳一、柳澤芳一、東京齋魚一、歸天齋正若、松旭齋明玉などいふがあつた。小梅は小綺麗な新造、柳一は今のとは別人である。今のは渡邊國太郎と云つて本名までが賣れてゐるれど、先のは橋本錦太郎と云ひ、本名など聞嚙つた人もなかつた。明玉は天一全盛の初期其の一座に後見をしてゐて、後寄席に出で、その後再び天一に附いて、各所の劇場興行の折に後見を勤めて居た。前藝を演る時、天何とか名乗る由を聞

いたが、よく覚えてゐない。

△儲斯う西洋手品師の名を並べて見ると、一の字が多い。正一の賣込み方が知られるでは無いか。

△養老マボロシと奇術師めかした名の映繪屋があつた。片假名で書いてあつても舊式たるは勿論の事。

△手品の蝶之助ほどは色つほくない代り、何處か真打らしい貫目を見せて居たは、其の蝶之助の人氣に優るとも劣らぬ美人、岡本宮子と云ふ新内屋さんであつた。

△三味線弾を宮濱と云つたが、後には宮子が宮濱と改めた。然し宮子宮濱と並び稱せられた頃が、宮子の全盛時代であつて、改名してからの人氣の壽命は割に短く、禽語樓小さんのお樂みとなつて後間もなく、寄席を退いて了つ

たと覚えてゐる。

△實の處、美人と云つたとて、何もそれが眼の覺める程の美さでもなかつたのであるが、岡本のお淨瑠璃の外に、振事と云ふお景物があつて、これが大した人氣藝。而して此の大人氣の抑は、碁盤踊を演つて、白い處をチラ／＼させるので、糸の仙人上へ落ちる大騒ぎ、高座の際ばかりが鮮押しの有様。と先ア當時盛んに言觸らしたもので、其の實は然うでなかつた。

△同じ新内でも、これは鶴賀のお淨瑠璃、若辰も亦一種の人氣者であつた。と云ふと、宮子蝶之助等にも劣らぬ美人の様に思召す向もあらうが、生憎此の御婦人は、痘神垂跡のお盲さんで、後年再び一寸出たが、直ぐ止した。

△此人の新内と云へば、何時も紙二枚ほど、後がお約束の浮世節、それもホンの一角で、終ひ際に都々一が二つばかり、而して其の一ツは、何時も「ランプ吹消す」と云ふ極り物。聲が細いので、少し離れると聞えたり聞えな

ツたり、随分とお高い代物であつた。けれども綺麗な管糸を手繰るやうな聲で、眞面目に新内を語るところに、女眞打としての價値を認められて居たは豪氣だ。

△盲の新内には、富士松ぎん蝶あつて、引つ搔廻しのアヂヤラ聲の絶叫節、可なり久しい男であつた。此の人の眞似を今の燕枝が演ると實に巧い、唯只不思議と云ふべきものである。

△富士松津賀太夫と云ふが鶴賀秀造又は鶴賀小秀太夫と組んで、新内専門に寄席に出てゐた。それから富士松魯中、桂家満登、三遊亭圓九などいふ名も一時大行燈に見えたのであるが、直な者では無かつたらしい、ハッキリとは覺えて居ない。

△右のは皆男であるが、女の新内に、春風枝女吉、富士松浪之助、鶴賀升六、立花家花子など云ふがあつた。

△清元には、清元福助と云ふ愛嬌者があつた。橘家壽と云ふのは、橘之助の妹弟子か何かで、小綺麗であつた爲可なり人氣があつた。此の壽後に家橘と改め、それから程なく廢業して藝妓となり、今では師匠となつて、以前世話になつた旦那の落魄してゐるのを御恩返しと貢いでゐるとか云ふ。變人と噂のあつただけ、藝人には珍しい殊勝さである。序に云ふが、春丈の低い萬年新造の、踊を演つた彼の花橘が壽の次である。

△青柳枝女、橘家小しめ、などいふのも清元であつたと思ふが、何にせよ、清元ばかりは女の世界で、此の流派の寄席藝人に、其頃男は無かつたやうである。尤、青柳新造と云ふのは男であつたが、これは枝女の三味線として、ホンのお役目に出てゐたに過ぎぬ。

△常磐津の女の方では、岸の家妻八、常磐家久の助などが賣れてゐた。岸の家綾吉同綾勢の一组、先の寶集家金之助達も可なり人氣のある方であつたが、

餘り問題にはならなかつた。

△大夫さんでは、家元の今の文字大夫が、岸澤の家元今の式佐と、鼻面を揃へて高座に上つた事がある。これは兩人が林中と文字兵衛とに世を狭ばめられての一時凌ぎ、然し寄席の絃物では近年での王であつたらう。

△和佐男大夫(後都大夫)が勝藏(後金藏)と一組になつて、寄席に出たのは古い事であつた。又古く、都路咲大夫同都といふ男女の二組も居た。

△古くからの大夫では吾妻大夫、好い男だらうと云ふ苦味走りを電光にして、道具を使つてのお芝居。随分と氣障つほかつたれど、仲大夫になつたり、又戻りの吾妻大夫になつたりの中に年を取り、われ等を哀つほがらしてのジメジメは、氣の毒でもあれど、それまで保つたる高座の壽命は、永く久しく偉いものと云へば云はれる。

△色物の義大夫としては、芝居掛りの竹本花大夫が有名であつた。鶴澤鬼若

の三味線で、大道具なしで演つた事もあつたが、やはり、團十郎の假聲で福島中佐を唸り、菊五郎の假聲で鹽原多助を語つたり見せたりの方が、賑かて人氣があつた。

△此の男、仲間からは半狂のやうに云はれてゐるが、其の變つた處が彼の世才のあつた處で、晩年義大夫界の口利となつて中老格に昇り、なか／＼役に立つたと云ふ。川上音二郎が本郷座に祝儀廢止の興行を始めた時、成程と想ひ着いて、三十間堀に一圓均一の薄茶料理富貴亭を開業し、畫家文人藝人の多くから可愛がられて終つたは、寄席藝人としては珍しい男である。

△チャリで有名な豊竹喜昇軒も、色物の席に出た事がある。竹本縫大夫鶴澤市左衛門と云ふ組もあつたとは覺えてゐるが、何様であつたか判然しない。

△女では播梅と云ふが古く居た。後に三崎座の女芝居に入つてチヨボとなり、鍊へた藝を地道に演つて居たが、何うなつたか。

△古い人では竹本紋勝、これは弘化生れゆる、三十年前としても大年増である。次いでは鶴澤今梅、これの娘が手品の歸天齋正若である。此外、竹本越登、豊竹小筑、竹本浪花、竹本傳之助、橘家喬子、竹本花子太夫、竹本小花、喜昇軒の娘鶴澤龜子などいふがあつた。傳之助は鬼若が弾いてゐた。喬子の絃は花澤八重吉、これは母親であつたと思ふ。

△鬼若と別れた花太夫は、芝居掛りの時、樂屋で三味線を弾かせたが、それは大抵一座の竹澤花之助が弾いた。此の花之助こそ後に小清一座の利け者花澤梅蝶である。花子は太夫と名乗つてもやはり女、斯ういふ例は色物に時々ある。彼の有名な豊竹柳子太夫がそれである。柳子の三味線は、其の頃豊竹蓮糸といふが弾いて居たが、確姉であつたと覺えてゐる。此の柳子が後に純女義太夫となつた鯉之助であるが、柳子時分には男の扮装で居た爲に、大抵の客は全く男の子と思つてゐた。明治十一年生れの彼は、當時根つから色氣

など無かつたのである。

△小花は花太夫の娘で、後に小清の弟子となつて看板を揚げたが、程なく藝妓となつた。大人しい利口な女で、これが富貴亭の今の主人である。

△偕これで大抵切上とするが、何流派ともないのに、春風柳壽齋と云ふ盲人があつた。法師一流の上方風の藝で、「勉強せい〜」と云ふ流行唄めいたものを弾きながら唄ひ、其の終ひに「ヒヤ〜」と云ふ囃しを、客に云つて貰ふ事にして景氣を付け、人氣取りに努めたが「縁かないな」の里朝の半分にも行かなかつた。ヒヤ〜の唄をお慰みに一つ記して見やう。字餘りで讀み難いが、大抵斯うであつたと思ふ。語呂の悪いのでこれ一つを覺えてゐるやうな氣がするのである。

「親は車夫でも其子は學校へやツて、勉強さするも末の爲め、勉強せい〜、石盤抱へて勉強せい、ヒヤ〜」。

△落語家では、何と云つても圓朝が偉かった。實は落語家の演る人情噺として、其の得意の續物は餘りに野暮だった、野暮と云つて失禮なら、餘りに眞面目過ぎて居て、演述法が忌に理に積んで居た。けれども其處が又圓朝の偉い所以でもあつて、哀い場合には自分からして先づ泣いて掛かるやうな演り方が、眞に迫るとか、行届いてゐるとか、類がないとか、日明盲の千人千人から哩々と噺し立てられて、遂に眞の大家名人と極めを附けて了はれたのである。兎に角話し方が新しかったのである。文樂や柳櫻のは、所謂落語家の人情噺風を守つてゐたので、圓朝と比べて上手も下手も無い、頭で演り方が違つて居たのだが、當時に在つては、文樂や柳櫻風の愛嬌のある、ノンビリしたる、聽いてゐて氣の詰まらない續き噺が眞の寄席の噺で、圓朝流のは却つて邪道のやうに、江戸通達からは云はれても居た。ダガこれは道理

である。眞面目一點張りにジリン／＼と客の胸倉を取るのは、講釋師の領分と大凡極まつて居たやうなものであつたから。

△然し圓朝は落語も巧かつた、つまり兩刀が使へたのである。三遊の今の天狗様方が、師匠の惚話を見得にする氣障な癖も、やはり圓朝の偉かつた證據の一つには相違ない。今では圓朝のやうに熱心な人は少ない、圓朝程度に素養のある人も少ない、自作の噺などは出ぬ譯である。

△圓朝に亞いで大名のあつたは、云ふまでもなく燕枝である。惡納まりの高座で、根つから面白くは無かつたが、自然の貫目もあり、普通智識もあつて、柳派を統轄して行くだけの資格は充分であつた。此人文筆の嗜があり、雜俳のやうな事には取分けて一種の才があつた。

△圓朝の文字は歌の字であり、燕枝のは俳句の字であり、二人の人物の通りであつた。

△圓生は餘程文育のやうに聞いたが、話は誠に巧かつた、然し人氣は無かつた。早分りのする詞で云へば、演り方が不器用であつた。此頃のやうに慌て者の藝論家が多かつた時ならば、矢鱈と問題にされた男だつたに、惜い事をした。

△柳枝は名前程の大看板でなく、客を立たせる方で有名な人であつたが、それでも何處かにオットリとした處があつて、今時の眞打の誰彼の如くチヨビたる様子のなかつたは、やはり搦手の大將軍、噂に遣れる程の鈍骨では無かつた。其の當時なればこそあれ、今居たらこれも問題の一人であらう。

△文樂は落語家のやうな話をする人で、當時の或る一派の通人や黒人や、これが本當の話だとして、彼の人情、噺に謳歌した。全く風采もよく、悪く片付けた高慢ちきな様子もなく、今の流行の語で云へば、藝に七分の柔味と、温味と、懐味と、それに三分の雷ひとがあつて、聽いてゐる此方が惚れッほ

くなる藝であり又人であつた。今も名人は門並のやうであるが、何れも皆がサガサしてゐる。

△柳櫻のは又一種サラリとした中に愛嬌があつて、當時大家揃ひの中に在つても、特に老巧者として客を引いた。忤の柳橋は、親父のを特別大割引にした風で、様子は似てゐても味は大分離れてゐた。然し踊は稽古した踊で、さもさも上手臭いのを氣障がられたが、それでも確に物になつてゐた。瘦せた小さな體に、ゾロリと大きな衣を着て、「柳橋ちよいと紀伊の國を」なんて、小ぢんまりした坐踊を踊る處は、藝人らしい藝人であつた。寒中お高祖頭巾を冠つて席を廻る車上の姿などは、實に婀娜つほい好い年増だつた。落語家芝居の立女形としても、何時も好い處を見せてくれたに、これも故人。イヤ芝居の事から思出したが、同じ芝居上手の今の圓右が、柳櫻の眞似が實に巧い。假聲物眞似の巧い圓右の藝の中でも、特に傑出したものであるが、今

のお客に聴かせるには些と古い爲であらう、何時にも演らぬ様である。これも惜い。

△下司ではあつたが片目の今輔、嘶も行けて三味線が弾けて、加之に喉が美いと來てゐる意氣な男。高座に他愛がなくなつて、それで居て藝になつてゐるなどは、何と小氣轉の利いたものでは無いか。海晏寺が有名だつた。

△それには引替へ、藝は確でありながら、其の確が鼻の先にぶら下つて、七六ヶしい高座の玉輔、高慢を云つて交つ返され、而して怒つては客と喧嘩する事毎々。これでは何程藝論家の煩くなかつた其頃でも、好い評判の立ち様なく、原因が結果、結果が原因、到頭世に拗者のバツとしたこともなく引下つた。

△高慢臭いのは、色物に出た講釋の伯圓、高座の前へ下りて椅子テーブル、時には服装も洋服で、何も持たずの素の口演、先覺者でもあつたらうなれど、

其の時分では可なり脅かしたものであつた。

△圓遊は例の他愛なし、ステテコと云ふ無意味なもので人氣を取つたが、年中新らしくと心掛ける其の操りの潤れてゐる處は、好かれ悪かれ獨得の藝、アハ、と笑ふには頃合の技倆を有つた人であつた。圓遊を學んで能はぬ愚劣な操りは、一時三遊の全體に毒となつて流れたが、圓遊の晩年に其の勢挫けて、鶉の眞似をする鴉も今や自らへタリ氣味なるは結構である。ケレンは眞似の利くもので無い。

△芝樂の名は、一時武装したが、先のはそんな頑固な者では無かつた。釋臺を前に置いて一寸した嘶、獨劍術などは野翫間藝だが、賣物の米山は流石に鮮かなものであつた。

△米山で思出したのであるが、美しい喉の茶樂と云ふ中通りの男があつて、片目でこそあれ上手振りこそしたれ、音曲では賣つてゐた。それが十數年前フ

ツと見えなくなつたのは、何うしたのかと思つて過ぎた幾年の後の事、歌舞伎座へ大隅太夫が出た時、一座の鑢の槍鏑を聞いて、これが大阪で大流行の由も承知して俶又數年の後、大阪の寄席で不圖右の茶樂が、高座に出るなり直ぐ槍鏑と云ふ註文を客から受けるのを、目前見てオヤと思ひ、段々土地の人に聞いて見ると、東京から流れ込んだ茶樂がこれを悉皆受けさせた結果、一般に流行り出したのだとの事。其の弘め屋の一人鑢太夫が歌舞伎の床の掛合に巫山戯た喉から、槍鏑のオツさ加減が新橋邊に一時氣を持つたなど、何時何處で何者が業をするか分らぬものだ。一藝ある茶樂は、大阪の高座で槍鏑と大津繪と木更津甚句の一つ二つを繰返してさへるれば、それで天下泰平なのであつたと云ふ。人間何でも一つは押へたものが有りた。

△音曲家として有名だつたのは、梅枝、つばめの兩人で、半可の間には毎々此の二人の優劣論が起つたが、梅枝のは何を唄つても木遣になると云ふのが

瑕、つばめのは間延びがして、而して忌に上手振つてゐると云ふが瑕。それでも何方も客には好かれた。中にも梅枝のは派手なので人氣が多かつた。つばめは直に弾けもしないに、扇歌を襲いで大看板と出世したが、又戻りのつばめになつて見たりは氣が利かぬ。壽ければ辱多しだ。梅枝も勝次郎と改名などしない方が好かつた。

△右の扇歌の前の扇歌は、女ながらも一方の旗頭、何うといふ纏まつた物を演るでも無いが、トツチリトンは毎晩お極まりの賣物、左の手の示指を年中紙で巻いてゐて、三味線を弾くに使はなかつたは、己むを得ずでは無く、態とやつたる曲であらうと噂された。これに對する女眞打は、今も盛んな橋之助であつた。

△圓左は死んで間がない故、別に事新らしく云ふにも及ばぬが、晩年落語研究會を同志と共に起した効空しからず、眞價を治く認められて終つたは幸福

である。

△才賀なる爺いさんは、大昔のまよで終ひまで演つてゐた。白子屋など有名であつたが、特に賣物であつたは兩國八景やトロロンなどであらう。然し此のトロロンの本物彼の法螺の貝を噛りながら錫杖を鳴らすデロレン祭文も、今は最早大道に跡を絶つてゐるゆゑ、右の落語も自然と狭い通用になつて了つた。

△才賀は當込み氣のない、既に地になつて了つてゐる操りの奇抜なのを用ひた。寝ると云ふ話の件で、一寸高座に寝轉んだり、尻を揚けると云ふ件で、客席の前へ下りて尻を端折り、而して尻を揚げる真似をして復高座へ戻り、息も吐かずに話の續きをやつたりの、随分烈い巫山戯方ではあつたが、われ等が知る頃には老人でもあつたし、涸れては居たしで、然してこれが氣障がられは爲なかつた。

△此の才賀は今の文樂の父であるが、才賀の同時代、其の弟子か弟分に榮賀と云ふがあつて、同く桂を名乗つた中老の人だけに、これも昔のまよの落語をした。此人の子が小さい時に市川團子（今の猿之助）の弟子になつて喜美造と云ひ、今中村鶴藏と出世して芝居に出てゐる。

△大看板での禽語樓、即ち先代の小さん、今のは反對に能辯で、而して新しい操りを輕妙に敏捷に打つ放した。考へて見ると、今の小さんより藝は下だが、活氣があつてよく客を呼んだ。

△儲、序だから云ふが、禽語樓決してヨク真打では無かつた。それで居て今の方が上なのは、今のが傑出してゐるからである。此の物語の範圍内に在る色物藝人で、前代勝りなのは實に小さん一人である。前に並べた諸真打の名を襲いでゐる今の燕枝、柳枝、文樂、柳橋、今輔、玉輔、圓左、圓遊等は何うである。先代の事をまだ云はなかつたが、志ん生とても然うである。

△一概に斯う振はざるのばかりが並んだのは、修行の仕方が本當でないからである。今の人は、落語家になるまでが、先人よりも一體に利口な爲、落語家になつてからの修行が下らなくて堪らず、結句藝人としては先人よりも却つて馬鹿に下手糞に出来上るのである。些と流行物の自覺でもして見たら何うだ。

△中通りの達者として、京枝、朝枝、年枝、柏枝などいふが柳にあつた。而して柳派はこれ等の人々及び、絃物や手品等に因つて、何の組も賑はされてゐた。其處で晝席は、一時柳に限つたものゝ様にまでなつた。

△京枝は一寸嘶もする、假聲も使ふ、三味線も弾く、仰山に云へば萬能に達した男であつたが、「取つて置」といふ事が出来ず、出ると其の儘興に乗る様な態度で、表藝も隱藝も洗ひ浚ひ一度に演つて了ふ爲め、斯く幾種も藝を有ちながら、兎角氣の變らぬ高座になるのみならず、何の藝もチヨビくして、

これが特色といふ評判物にならずじまひの、單に器用といふだけで市が榮えて了つたのは詰まらない。京枝ばかりでなく、器用な人は氣をつける可きだ。

△朝枝はソ、クサした面白い話と、扇の藝と活惚とで賣れてゐた。年枝は阿呆陀羅や一人茶番で、フワくした處に人氣があつた。柏枝は後に小勝となつて、間もなく廢業し、飯田町邊に藝妓家の御亭と鎮座したが、これは相應に話が出来た。他愛のないのはやはり年枝でありはしたが、これとても今の立つて騒ぐ人達のやうに、然う悚々と寒氣はさせなかつた。

△桂文治は一時立消えの姿であつたのが、中途復持直し、十年一日の如き素讀をして居た。然し芝居嘶が得意だけに、一人で見せる立廻りなどは無類であつた。それから假聲でばかり賣つてゐた三遊の金朝、實は大した事もなかつたのであるが、人の餘り使はぬ左團次が巧かつた一個條で、十分賣通して了つたのは幸運な男である。遠慮なく云へば、其の米櫃の左團次も後には樂に

なり切つて、大分弛んで来たのであつたが、其の中、氣の毒にも目を病んで退隱。それで一時左團次は高座に絶えたが、語蝶が滅法巧く演り出したので、高島屋は復活し、同時に語蝶は米枝と名を更へ、メキくと賣出したのである。

△大阪に居る圓馬、これも立派な藝人である。三遊では古老の部であるに、何うして行き限りになつて了つたのか。

△下らぬ事で全盛の期を得たのは、圓遊の外にヘラ／＼の萬橋あり、ラツバの圓太郎あり。中にもヘラ／＼の一時の流行り方と云ふものは、馬鹿々々しいのを通り越して、寧ろ物凄しい程であつたが、それも當座の事であつた。其處へ行くと圓太郎は間が好かつた。ラツバを吹いてガタ馬車に反對にも圓太郎の名を負はせ、延いては、馬車の穢いから轉じて、穢い物一切の符牒にまで、此の圓太郎を蔓らせ、エンダラ馬車を先祖に、エンダラ帽子、エンダ

ラ時計、エンダラ會社、エンダラ娼妓。エンダラは遂に成語として通用するに至つた。「シダラのない」を半可共が逆にして、「ダラシのない」と云つた洒落を、昔からある立派な俗語の如く心得、世間知らずの學者達が難しい顔で云つてゐるのに思合はせて、エンダラの起原も後には分らなくならうかと、下らぬながら此際に云つて置く。

△鶴枝の生人形も巧みなものであつた。手拭とも云へば云ひ得る程度の色巾五六本、それに願髻に使へる様なピラ／＼のある黒い肩懸、附け眉毛。雑物は甚簡單であつて、而して三國誌、彌次喜多などを賣物にして居た。今の人のは體の殆ど全部を其の者らしく裝飾して了つて、サア然う見えるだらうと云ふのである。お手數な事だ。

△名を忘れたが、百面相といふ事を演る爺いさんが居た。下唇が鼻のあたりまで届く工合餘り心地の好いものでは無かつた。それから養老瀧太郎であ

ツたかと思ふ、足藝を巧に演つたが、斯う云ふ藝も廢つて了つた。
 △總じて江戸仕立の洒落た藝がなくなつた。其の癖紳士學者に意氣がりは殖えて居る。

△才賀風の落語家に、語樂と云ふ中爺いさんがあつて、昔のまよの落語をした。彼の左團次で賣出した語蝶は此の振はざる舊家の弟子であつたのだ。それから、才賀よりも尙昔者のお爺いさんに、薪梅と云ふがあつた。其頃でさへ古い人だと云はれてゐた程とて、當時のわれ等小僧つ子の耳には、珍しくも變つた風の落語に響いた。皺びながらも異なる聲で演る唄の文句に、何とやらかして「これで二朱かいな」と云ふがあつたのだから、古色蒼然さ加減推して知るべしである。思へばわれ等の耳は、前世紀からの藝でも教育されたのである。嗟古道具！

△義太夫の語物番組は、或然明治十九年の夏の初頃、越路太夫(攝津大掾)が上京して、先づ茅場町の宮松亭に出勤した時、毎日の語物を、西洋紙に木版で刷り、客に一枚づつ出したのに始まる。大きさは、新聞紙一頁の四つ切ぐらゐで、全部ビラ屋流の字を木版に彫つたものであつたが、後には藝人の名だけを木版にし、餘は活字にして了つた。最初の番組の印刷所は、京橋の秀英舎である。

△その後、二十二年の春、大隅太夫が三度目で上京の時、二十三年の春越路が又來た時、二十四年の冬組太夫が松太郎の絃で來た時などは、まだく藝人の名や「義太夫番組」や「大入叶」やの文字は、木版で刷つてあつた。序に記す、此の義太夫番組を一般の義太夫席で用ひる事になつてから、其の印刷を引受けたのは、久松町の清泉舎、西今川町の三贊舎、淺草の並木活版所、久松町の有文舎、藏前の好文堂、蠣殻町の勝島等である。

△語物が新聞紙上に毎日出るやうになつたのは、明治二十六年の五月頃、都新聞で始めてからである。席の名が五號活字、語物は六號であつたと思ふ。寄席案内の新聞に出初は、二十二年頃の「やまと」からである。

△女義太夫が肩衣を着けて床に上がるやうになつたのは、竹本京枝が最初である。これは本人の口からも聞いた。

△寄席の義太夫は、明治二十年頃までは、男の一座で五段、女でも六段ぐらゐるより多いのは無かつたが、段々怪しい太夫が殖えて、一人で四五十分から一時間前後は持ち切れない爲、終にドカ／＼大勢現れる事になつた。木戸錢も女で四錢男で五錢ぐらゐるであつたのが、女で六錢八錢、男で八錢十錢と、何時か段々鰻上りに高くなつた。

△三十二年の夏、大隅太夫が歌舞伎座に出勤してから、義太夫の劇場興行が流行り出し、重之助一座や名瑠吉一座が新富座に、住太夫一座が演伎座に出

勤するやうな仰山な事になり、今では下手をまごつくと、義太夫を一晚聞いて五圓の金がチャアフウになるまでになつて了つた。

△義太夫の床を廻すやうにしたのは、神田の新聲館が人形芝居を興行中の事であつたが、普通の寄席でこれを行つたは、三田の春日亭で、それは明治二十三四年の頃であつた。次いで設けたのが花川戸の東橋亭。

△晝席に始終義太夫を掛けてゐたのは、右の東橋亭と、先の兩國橋の袂に在つた新柳亭との二軒である。南鍋町のつる仙では、夏場だけ打つた事がある。市區改正の爲立退かざるを得なくなつた新柳亭が、今の宮松の經營者である。先の主人から譲受けたのであつて、依然義太夫の定席として、東京第一の稱がある。

△床本を活版に翻刻したものは、明治十六年の秋に初めて出來た。人氣のあるものを六七種小形の西洋綴にして挿畫を入れ、頁は二百ぐらゐる、「繪入倭文

「範」と題されたのであるが、義太夫熱の高まらぬ頃の事として、此の小冊子五部を發行するに、十八年の春まで掛かった。それが二十一年の頃となつて、女義太夫の景氣盛んとなるや、「懷中義太夫」と云ふ一段物の活版本が現れ、二十頁ぐらゐあつて一部金五厘、後に値が上がつて倍の一錢。出版元は何方も通四丁目の書肆金櫻堂である。

△十五年中近松物の院本を活版本に翻刻したるも、賣行思はしからず、暫時中止の姿でゐた神田宮本町の武藏屋は、右の景氣に乗じて出版を續け出し、二十三年頃には、「近松叢書」と名けて數十種を發市し、尙諸作者のを集めたる「新編倭文範」と云ふをも賣出した。すると、本郷元富士町の文學書院から「文學叢書」の中として、近松物が出る。下谷北稻荷町の三三文房からも、「文學資料」として同趣のものが出る。金櫻堂からは更に「三十六佳撰」が出る。元祿文學流行と共に、義太夫熱は遽に高くなつたのである。

△女義太夫で一枚繪になつたのは、今も働いてゐる小土佐と綾之助。尤、小土佐のはピラ繪が繪草紙屋の店先に掲げられたのであるが、綾之助のは美人十二時と云つたやうな錦繪の中に、夜の十一時の分として、全く一枚繪にされたのである。男装で有名であつた綾之助は、此の頃散髪を伸ばして、男鬚に結つてゐた。繪には賛があつた、「竹本の節もみごとにあやなして、細かく語る十か十一時」と云ふのであつたと思ふ。

△女義太夫の散髪でゐたのは、綾之助の外に、後に住之助になつた住八、色物へ出て破格に太夫と名乗つた柳子など。

△子供芝居へ旗を贈る事始まつて以來、寄席藝人にも旗を贈る人が出來たが、其の掲げ初めは、呂昇であらう。明治三十何年頃かに上京し、大歌舞伎の役者へ一々挨拶に廻つた處が直々御返禮もなく、少しばかりの金がお印に來たので、爲う事なしに場内に吊れる程度の紫の旗を一對拵へ、片方に團十

郎片方に菊五郎の名を白抜きに記したのは、外見の爲の呂昇の智慧とは云へ、東京の者からは、兩名優の好い恥曝しであつた。

△女義太夫が語り終りて床に頭を下ぐる時、御退屈様と云ふ事は、傳之助より始まつたと云ふが、小土佐の「御退くつつアま」は、若いお客をトロくにさした。

△大入混雑の際、煙草盆の代りに燐寸と竹筒を寄席で出す事は、明治十六年綱太夫が瀬戸物町の伊勢本に出た時から始まつた。又、寄席の場内に「懐中物御用心」と書いた繪ビラを貼るは、二十五年頃からで、長谷川町のビラ屋ビラ辰が、自分の考案で拵へたのを、各席へお歳暮に配つたのに起因する。

△女義太夫で初めて床に束髪で現れたのは、二十二年の春、阿波から来た小縁と云ふ一寸した眞打であつた。

△何うする連と云ふものは、二十二年頃から出来た。最初のは若旦那の書生

さん達で、時々笑はせるぐらゐの邪氣のないものであつたが、遂には大變なお客様になつた。

△新聞雑誌に、讀者からの演藝投書を掲げる事は、三十二年の夏、予が報知新聞で行り始めてから盛んになつた。女義太夫に關する端書投書は、毎日机上に山を成した。

△東京に柳の流行り出したは綱太夫が當てたからとの事であるが、女の語物に御所三の流行り出したは、綾之助が受けさせたに因る。中將の語り人の殖えたのは、小政が賣込んだからである。壺坂や大文字屋は、近年大阪から流行つて来たものやうに云ふ人が多いが、これは二十二年頃、既に、照勝、鶴蝶、など云ふ女達に因つて、繰返し繰返し語られてゐたのである。壺坂は、奈良梅と云ふ女も得意で語つた。

△何うする連勃興の前後、東京居附で有名であつたのは、男の太夫で、綾瀬、

播磨、津賀、織、祖、岡、相生、生駒、それに朝など。女では京枝、東玉、小政、鶴蝶、綾之助、小住、住之助、駒之助、小虎、清玉、素行（後に瓢となつた元の三福）、綱巴津、小巴津、小土佐、稻枘、小緑、越子、熊梅、錦、東猿、大吉、小米、新吉、小清、などで、京子、小房、小豊後、友之助の如きも引續いての人氣者。三味線弾としては、男の方で、紋左衛門、文藏、廣兵衛、仲助、豊造、豊吉、八兵衛、新造、大造、團八、重太郎、寛三郎（後の仲助）、松太郎など。女の方で、三生、花友、語久、團玉、清花、熊玉、鐘枘、鶴加津。と先アこれ等で、一寸來た女の太夫には、都、鳴門などがあつた。△種々の寄席話、それからそれへと思出せば際限が無い。次第不同、手當り次第、と云ふ勝手な事で御免蒙つて置く。

あつま唄 — (終) —

大正七年三月二十八日印刷
大正七年四月五日發行

(定價九十錢)

著 作 權 所 有
◀ あつま唄 ▶

著 者 岡 鬼 太 郎

發 行 者 東 京 市 下 谷 區 池 之 端 茅 町 二 丁 目 三 番 地

發 行 者 川 口 陟

東 京 市 下 谷 區 池 之 端 茅 町 二 丁 目 三 番 地

發 行 所 南 人 社

振 替 東 京 三 一 四 二 一

印 刷 所 東 京 市 本 所 區 番 場 町 四 番 地

凸 版 印 刷 株 式 會 社 本 所 分 工 場

奇拔放史之眼

再版

室津鯨太郎著 杉浦非水裝幀

秀吉論

美裝箱入四六版布表
紙金文字入三百二十頁
定價一圓二十錢
郵稅八錢

著者多年の蘊蓄を傾倒して本書を著せり、之を單に一個の英雄傳として見るも、所論陳套ならず潑刺として近代人の胸奥に觸る、古英雄の一擧手一投足、悉く現代に對照して諷刺あり諧謔あり皮肉あり、蓋し青年修養書として本書の右に出づるものあらざるべし。

■時事新報曰 概世の英傑豊臣秀吉が人と成りを縦横の觀察批判を加へし者史眼の精疏は一概に言ふ可からずと雖も、筆鋒の奇勁考察の辛辣讀者をして驚畏の眼を瞠らしむ

■やまと新聞曰 蓋世の英雄秀吉を各方面より評論したるものにして其戰略、智略、外交手腕、群臣操縱術、人心收攬法より私行情事に至るまで英雄の心理を遺憾なく解剖したるは流石に著者の史眼あるを偲ばしむ文章亦流暢なり

■大阪朝日新聞曰 豊臣秀吉を評傳した著作は今日迄既に可なりな數に達してゐるが其の内本書は此の古英雄を自由に觀察批評して彼の行動心事を剔抉し現代青年が秀吉を如何に觀るかといふ點を極めて興味深く明快に叙述したのを特色とする末尾に「秀吉年譜」を添へたのも深切で青年の讀み物として甚だ適當なものであらう

終